

寺家遺跡第12次調査報告書

— 個人住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

1997・3

羽咋市教育委員会

寺家遺跡第12次調査報告書

— 個人住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

1997・3

羽咋市教育委員会



寺家遺跡周辺の航空写真

寺家遺跡第12次調査報告

目 次

	頁
例 言	IV
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の経過〈日誌抄〉	6
第3章 遺構と遺物	8
第1節 遺構と遺物	8
1. 焼土	8
2. 1号堅穴式建物	10
3. 2号堅穴式建物	12
4. 3号堅穴式建物	14
5. その他の遺構	24
第2節 包含層・その他の出土遺物	25
1. 縄文時代の遺物	25
2. 弥生時代の遺物	25
3. 古墳時代の遺物	25・26
4. その他の遺物	26
第4章 まとめ	30

図版目次

巻頭図版 1	寺家遺跡周辺の航空写真(南から)	
図版第 1	寺家遺跡と調査箇所(上空から)	
図版第 2	(1)調査区近景(東から)	(2)焼土面検出状況・全景(西から)
図版第 3	(1)焼土検出(東から)	(2)焼土検出(西から)
	(3)土器出土(西から)	(4)一括土器出土(北から)
	(5)遺構検出状況・全景(西から)	
図版第 4	(1)焼土検出(西から)	(2)焼土検出(東から)
	(3)焼土断面(東から)	(4)焼土断面(東から)
	(5)遺構掘り下げ作業(東から)	
図版第 5	(1)遺構・遺物検出状況・全景(西から)	(2)遺構・遺物検出状況(東から)
図版第 6	(1)3号堅穴式建物出土遺物(東から)	(2)3号堅穴式建物出土遺物アップ(東から)
図版第 7	(1)銅板片出土(上から)	(2)紡錘車出土(東から)
	(3)鉱滓出土(南から)	(4)臼玉出土(上から)
	(5)遺構検出状況(東から)	
図版第 8	(1)1号堅穴式建物検出(南から)	(2)2号堅穴式建物検出(西から)
	(3)3号堅穴式建物検出(北から)	(4)1・2号堅穴式建物検出(西から)
	(5)1号土坑断面(西から)	(6)ピット 1 断面(西から)
	(7)ピット 9 断面(南から)	(8)1号堅穴式建物焼土(南から)
図版第 9	(1)調査区完掘・全景(東から)	(2)1・2・3号堅穴式建物完掘(東から)
図版第10	(1)3号堅穴式建物焼土検出(西から)	(2)3号堅穴式建物焼土断面(北から)
	(3)1号土坑完掘(西から)	(4)ピット 1 完掘(西から)
	(5)調査区西側壁面(東から)	
図版第11	(1)調査区北側壁面(南から)	(2)発掘調査協力者
図版第12	焼土と包含層上面の出土遺物	
図版第13	1号堅穴式建物出土遺物	
図版第14	2号堅穴式建物出土遺物	
図版第15	2号堅穴式建物出土遺物・3号堅穴式建物出土遺物	
図版第16	3号堅穴式建物出土遺物	
図版第17	3号堅穴式建物出土遺物	
図版第18	3号堅穴式建物出土遺物	
図版第19	包含層・その他の出土遺物	
図版第20	包含層・その他の出土遺物	

挿 図 目 次

	頁
第1図 位置と砂丘概念図	1
第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図 分布調査位置図 (1/1,000)	5
第4図 調査区グリッド割図 (1/120)	5
第5図 焼土面実測図 (1/70)	8
第6図 焼土と包含層上面の出土遺物実測図 1 (1/3)	9
第7図 1号堅穴式建物出土遺物実測図 2 (1/3)	11
第8図 2号堅穴式建物出土遺物実測図 3 (1/3)	13
第9図 出土遺物実測図 (1/70)	14
第10図 遺構実測図 (1/70)	15 · 16
第11図 3号堅穴式建物出土遺物実測図 4 (1/3)	18
第12図 3号堅穴式建物出土遺物実測図 5 (1/3)	19
第13図 3号堅穴式建物出土遺物実測図 6 (1/3)	20
第14図 3号堅穴式建物出土遺物実測図 7 (1/3)	21
第15図 3号堅穴式建物出土遺物実測図 8 (1/3)	22
第16図 3号堅穴式建物出土遺物実測図 9 (1/3)	23
第17図 遺構実測図 (1号土坑 1/70 · ピット1 1/35)	24
第18図 包含層・その他の出土遺物実測図 10 (1/3)	27
第19図 包含層・その他の出土遺物実測図 11 (1/3)	28
第20図 包含層・その他の出土遺物実測図 12 (1/3)	29

表 目 次

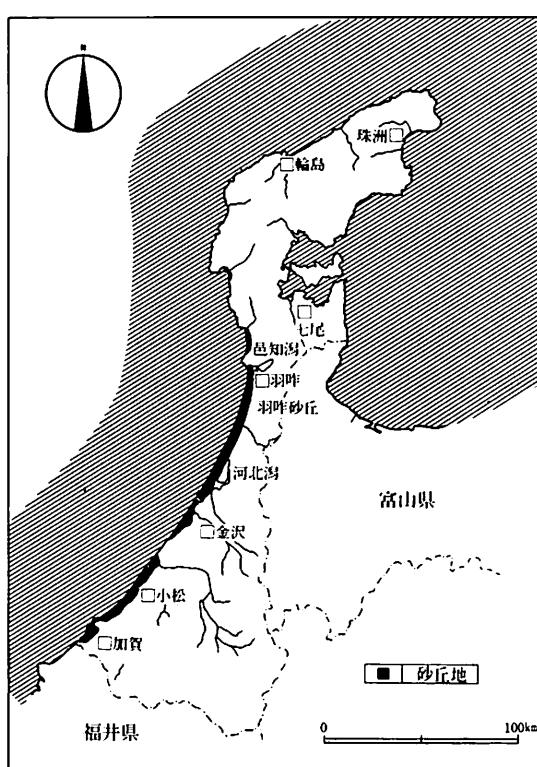
第1表 周辺遺跡地名表	4
-------------------	---

例　　言

1. 本書は、石川県羽咋市柳田町に所在する「寺家遺跡」の第12次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、個人住宅建設に伴うもので、羽咋市教育委員会が実施した。調査に係る費用は国庫及び県費の補助による。
3. 発掘調査は、羽咋市教育委員会文化課主事坂元 勇・同嘱託宮下栄仁が担当した。また、庶務は同係長谷内頑央があたった。
4. 試掘調査は、平成7年10月5日に行い、本調査は、平成8年4月22日から6月8日の期間延べ32日間で実施した。
5. 発掘調査の実施にあたっては柳田町の有志の参加・協力を得た。
稻安和子・菊井はつえ・坂本 文・中島キミエ・前田サヨ子・宮田成子
6. 出土遺物の整理及び報告書作成にあたっては、宮下の指導のもと、遺物洗浄・接合・記名・実測・トレース作業を能山真登加・楠みち子・上田郁代・上井直子・坂元が行った。
図版作成・写真撮影を坂元が行った。
7. 本書の執筆・編集は、谷内・宮下の助言・指導を受けて坂元が行った。
8. 遺構・遺物挿図の指示は、下記のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は掲載挿図内にスケールなどで示した。
 - (2) 方位はすべて磁北を表している。
 - (3) 水平基準線の数値は海拔高を示している。
 - (4) 写真図版中の遺物には通し番号を付し、本文中の挿図番号に一致する。
 - (5) 土器実測図の調整でKをケズリで示している。
9. 調査によって得られた資料（遺物、実測図、写真など）は、羽咋市教育委員会が一括して保管している。
10. 発掘調査から報告書に至るまで、多くの方々や機関から、御指導・御協力を賜った。
ここに感謝の意を表したい。

川畠 誠 小嶋芳孝 白田義彦 中條茂雄 本田秀生 松山和彦
安 英樹 石川県教育委員会文化課 石川県立埋蔵文化財センター¹⁾
(社)石川県埋蔵文化財保存協会 羽咋市文化財保護審議会 羽咋市歴史民俗資料館
柳田町町会 一松建設

第1章 遺跡の位置と環境



第1図 位置と砂丘概念図

能登半島の基部西側に位置する羽咋市域の地形は、西北部の眉丈山丘陵（標高171m）と南東部の碁石ヶ峰（標高461m）を有する石動山丘陵、これらの丘陵に挟まれた低地の邑知地溝帯、そして日本海と接する海岸に発達した羽咋砂丘とに大きく区分されるが、寺家遺跡は羽咋砂丘の北端に立地している。

羽咋砂丘は、内陸側から海側に向かって、縄文時代前期に形成された内列砂丘、縄文時代中期の初めの中列砂丘、弥生時代末～古墳時代初頭の外列砂丘の三つの横列平列砂丘に区分することができる。これらの海岸砂丘の形成がもたらしたものとして、邑知潟の形成があげられる。かつて縄文海進時に入り江であった所が、砂州（海岸砂丘）の発達によって次第に海から切り離され、潟化していったとみられる。現在では国営干拓建設事業（昭和23年度～昭和43年度）などによって水田地帯と化しており、僅かに残る86ha（干拓前の潟水面積456ha）の遊水池にかつての面影を残しているにすぎない。そこで、本遺跡を取り巻く周辺の主な遺跡を時代別に概観してみたい。

縄文時代の遺跡は、その大部分が眉丈山地の山麓や海岸段丘に立地しており、寺家オオバタケ遺跡、一ノ宮左弥遺跡、本遺跡などが知られている。本遺跡の調査から前期前半の北白河下層にはじまり後期の堀内併行の土器までの各時期の遺物が出土している。こうした遺跡の分布状況は、当時の邑知潟の形成と対応するものであり、低湿地に臨んだ砂丘や段丘部分が、縄文人の生活空間として適していたことがうかがわれる。

弥生時代に入ると北九州から波及した稻作文化は、日本海沿いに極めて短期間のうちに北上していることが明らかにされている。典型的な海跡湖である邑知潟南岸の扇状地に位置する吉崎・次場遺跡⁽¹⁾は、遅くとも前期新段階には集落が成立し、以後古墳時代初頭に至るまで一貫して同地域の母村的存在として、あるいは能登における在地勢力の拠点として重要な役割を担っていたことが推定される。後期遺跡になるとその数は急増する。周辺では、釜屋遺跡、東釜屋遺跡、などがあり、北部段丘には、柳田うわの遺跡、柳田シャコデ遺跡が、また、砂丘内縁部には本遺跡、千里浜遺跡など多くの遺跡が点在している。

古墳時代に移行すると弥生時代後期にピークに達した各集落は廃絶しており、集落遺跡の調査に関してはあまり進んでいなかったが、最近の調査で古墳時代前期の遺物が多量に出土した太田ニシカワダ遺跡、本報告の寺家遺跡で後期初頭の堅穴式建物が検出され、また、シャコデ遺跡⁽²⁾で堅穴（7世紀前半）と掘立柱建物（7世紀後半代）、本遺跡砂田地区で堅穴（7世紀前半）、釜屋・新保・猫ノ目遺跡から堅穴住居跡（7世紀第三四半期）が検出され、序々に同時代の空白が埋められつつある。

一方、古墳は海岸段丘上と砂丘上にその大部分が立地している。砂丘上の古墳群は市街地と化したために墳丘の正確な形はつかめなくなっている⁽³⁾。段丘上の古墳は、全長90m前後と推定できる日本海側で屈指の帆立貝形を呈する滝大塚古墳⁽⁴⁾（5世紀前半）に始まり、滝古墳群（6世紀前半）オーケウジ古墳群（6世紀後半）と展開する滝岬古墳群があり、さらに宮ノ山古墳（5世紀前半？）から山伏山古墳（6世紀前半）上野古墳群へと続く柳田古墳群⁽⁵⁾の2群が滝岬と柳田丘陵地帯に整然とまとまっている。

加えて、柳田古墳群が分布する丘陵の開折谷では、県内でも古い時期（5世紀末）の須恵器生産⁽⁶⁾が行われており、こうした当時の先進的な文化を導入できた地域首長集団が滝岬及び本遺跡周辺に存在していたという歴史的事実を物語っている。

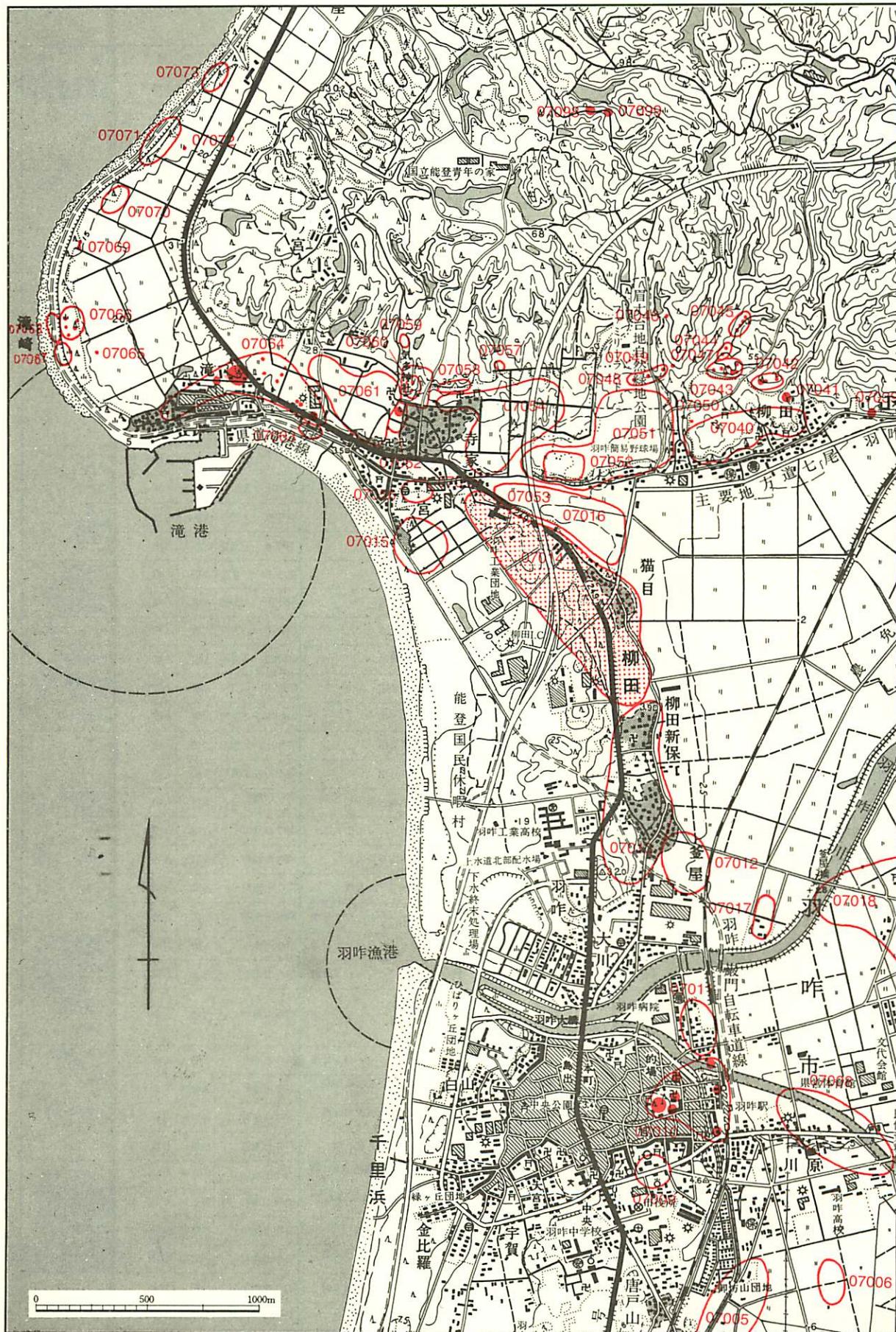
歴史時代の遺跡では、そのほとんどが本遺跡周辺でみつかっており、シャコデ廃寺跡⁽⁷⁾、一ノ宮遺跡、氣多社僧坊群⁽⁸⁾などといった氣多神社に関連する遺跡などが知られており、宗教的な色彩の濃い地域として機能し続けてきた結果の現れとして捉えられよう。以後、15世紀初頭の砂丘の移動によって本遺跡が完全に埋もれてからは、これらの遺跡が立地する海岸段丘上での社家の関係施設や社僧坊の建設が活発になっていた模様である。

註

- (1)橋本澄夫『次場遺跡』「羽咋市史」原始・古代編 1973 羽咋市
- 福島正実『吉崎・次場遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987 金沢市
- (2)河村好光『羽咋市柳田シャコデ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1984 金沢市
- (3)吉岡康暢『羽咋古墳群』「羽咋市史」原始・古代編 1973 羽咋市
- (4)中條茂雄『滝・一ノ宮古墳群』「羽咋市史」原始・古代編 1973 羽咋市
- (5)田嶋明人『柳田古墳群』「羽咋市史」原始・古代編 1973 羽咋市
- (6)福島正実『柳田タンワリ1号窯』石川県立埋蔵文化財センター 1982 金沢市
- (7)浜岡賢太郎・谷内硕央・小嶋芳孝・木立雅朗『柳田シャコデ廃寺跡』羽咋市教育委員会 1986 羽咋市
- (8)湯尻修平『羽咋市氣多社僧坊群』石川県立埋蔵文化財センター 1984 金沢市

〈引用・参考文献〉

- 浅野幸雄『長者川遺跡』「羽咋市史」原始・古代編 1973
小嶋芳孝『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター 1986・1988
谷内硕央・今井淳一『釜屋遺跡』羽咋市教育委員会 1989
谷内硕央・今井淳一『寺家遺跡第8次調査報告書』羽咋市教育委員会 1989
宮下栄仁『寺家遺跡第10次調査報告書』羽咋市教育委員会 1993
『羽咋市史』羽咋市教育委員会



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	出 土 品	遺跡番号	名 称	所 在 地	種 别	時 代	出 土 品
07005	長者川遺跡	羽咋市兵庫町・松ヶ下町・御坊山町	散布地	縄文～平安	縄文土器、弥生土器、踏手柄、土師器、須恵器	07049	柳田テンジク古墳	羽咋市柳田町	古墳	古墳	須恵器、小札様鐵板、鐵鎌、刀子
07006	柳橋遺跡	羽咋市柳橋町	散布地	不詳	土師器	07050	柳田セックデン古墳	羽咋市柳田町	古墳	古墳	須恵器、勾玉
07008	子鶴川遺跡	羽咋市鶴多町・東川原町	散布地	弥生～古墳	土器	07052	柳田シャコデ廃寺	羽咋市柳田町	寺跡	奈良・平安	瓦、瓦塔、仏像、土師器、須恵器
07009	羽咋高校前遺跡	羽咋市旭町	散布地	弥生	土器	07053	柳田シャコデ1号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器
07010	羽咋御陵山古墳	羽咋市川原町	古墳	古墳		07054	氣多社僧坊群遺跡	羽咋市寺家町	散布地	縄文～中世	土器、石器、金属製品
	羽咋大谷塚古墳	羽咋市川原町	古墳	古墳		07055	寺家モスケ古墳	羽咋市寺家町	古墳	古墳	須恵器、金環、ガラス小玉
	羽咋水犬塚古墳	羽咋市川原町	古墳	古墳		07056	一ノ宮郵便局遺跡	羽咋市一ノ宮町	散布地	弥生	亞、甕
	羽咋宝塚古墳	羽咋市川原町	古墳	古墳	須恵器 短頸壺 (古墳後期)、环 (平安後期)、珠 洲焼甕	07057	大豪寺中世墓	羽咋市寺家町	墳墓	中世	須恵器、珠洲焼、人骨
	羽咋猪子塚古墳	羽咋市	古墳	古墳		07058	寺家中世墓	羽咋市寺家町	墳墓	中世	
	羽咋蛭塚古墳	羽咋市東川原町	古墳	古墳	玉類(散逸)	07059	一ノ宮左旁遺跡	羽咋市一ノ宮町	散布地	縄文	磨製石斧
	羽咋劍塚古墳	羽咋市東川原町	古墳	古墳		07060	氣多1号中世墓	羽咋市寺家町	墓	中世	
	07011 的場農業倉庫前遺跡	羽咋市	場町	散布地	弥生		氣多2号中世墓	羽咋市寺家町	墓	中世	
07012	釜屋倉ノ下遺跡	羽咋市釜屋町	散布地	平安～中世	須恵器、土師器、珠洲焼	07061	一ノ宮遺跡	羽咋市一ノ宮町・寺家町	集落跡	古墳～中世	須恵器、土師器、珠洲焼
07013	釜屋遺跡	羽咋市釜屋町・柳田町	散布地	縄文～古墳	土器、石器、刀子	07062	若宮屋敷跡	羽咋市寺家町	散布地	不詳	礎石
07014	寺家遺跡	羽咋市寺家町・柳田町	祭祀・神社関係	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、氣多型土器、中世陶瓶、陶器品、鐵製品、三彩、ガラス製品	07063	不動寺院跡	羽咋市一ノ宮町	寺跡	中世	板碑、五輪塔、宝冠印塔
07015	寺家海岸遺跡	羽咋市寺家町	散布地	弥生	弥生土器	07064	滝1号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	円筒埴輪、須恵器
07016	柳田猫ノ目遺跡	羽咋市柳田町・寺家町	散布地	縄文～中世	土器、石器、木器、金銀製品		滝2号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	円筒埴輪、須恵器(石鍬)
07017	東釜屋遺跡	羽咋市東釜屋町	散布地	弥生	弥生土器		滝3号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	須恵器、直刀2、鐵鍬、馬具
07018	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	散布地	弥生～中世	土器、土製品、石器、木器、玉、鏡		滝4号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	天井石、須恵器
07039	柳田ヒガシデ1号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	不詳			滝5号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	円筒埴輪、石材
07040	柳田うわの遺跡	羽咋市柳田町	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器甕、甕、高杯、器台、石燈籠		滝6号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	円筒埴輪、須恵器
07041	柳田宮の山古墳	羽咋市柳田町	古墳	古墳			滝7号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	須恵器
07042	柳田山伏山1号墳	羽咋市柳田町	古墳	古墳	直刀、刀子、馬具、玉類、須恵器		滝8号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	
	柳田山伏山2号墳	羽咋市柳田町	古墳	古墳			滝9号墳	羽咋市一ノ宮町	古墳	古墳	
07043	柳田うわの1号遺跡	羽咋市柳田町	古墳	古墳	直刀、須恵器	07065	滝ザンサ山古墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	石材
	柳田うわの2号遺跡	羽咋市柳田町	古墳	古墳		07066	滝オーショージ1号墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	須恵器
	柳田うわの3号遺跡	羽咋市柳田町	古墳	古墳			滝オーショージ2号墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	須恵器短頸甕、土師器甕、朱塊
	柳田うわの4号遺跡	羽咋市柳田町	古墳	古墳			滝オーショージ3号墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	須恵器甕、高杯、笠、土師器甕
	柳田うわの5号遺跡	羽咋市柳田町	古墳	古墳			滝オーショージ4号墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	須恵器高杯、恩、堤焰、檢瓶、甕、土師器
	柳田うわの6号遺跡	羽咋市柳田町	古墳	古墳			滝オーショージ5号墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	檢瓶、堤瓶、恩、甕、直刀、朱塊
07044	柳田ウワノ1号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器、鐵滓	07067	滝・柴垣製塙遺跡群F地区	羽咋市滝町	製塙跡	奈良・平安	須恵器、土師器、製塙土器
	柳田ウワノ2号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	不詳	須恵器	07068	滝・柴垣製塙遺跡群E地区	羽咋市滝町	製塙跡	奈良・平安	須恵器、土師器、製塙土器
07045	柳田五郎兵衛山1号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器甕、甕身、环甕、恩、平甕、圓面鏡、箇、陶馬	07069	滝・テングミズ古墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	
	柳田五郎兵衛山2号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器	07070	滝・柴垣製塙遺跡群I地区	羽咋市滝町	散布地	不詳	須恵器、石罐
	柳田五郎兵衛山3号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器	07071	滝・柴垣製塙遺跡群D地区	羽咋市滝町	製塙跡	不詳	須恵器、土師器、製塙土器
	柳田五郎兵衛山4号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器	07072	滝白尾塙古墳	羽咋市滝町	古墳	古墳	須恵器
07046	柳田アサバタケ1号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	奈良	須恵器	07073	滝・柴垣製塙遺跡群C地区	羽咋市滝町	製塙跡	不詳	製塙土器、土師器
07047	柳田タンワリ1号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器、陶甕、圓面鏡	07098	谷内川大池1号窯跡	羽咋市柴垣町	窯跡	平安	
07048	柳田テンジク1号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器	07099	谷内川大池製鉄跡	羽咋市柴垣町	製鉄跡	不詳	
	柳田テンジク2号窯跡	羽咋市柳田町	窯跡	古墳後期	須恵器						

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

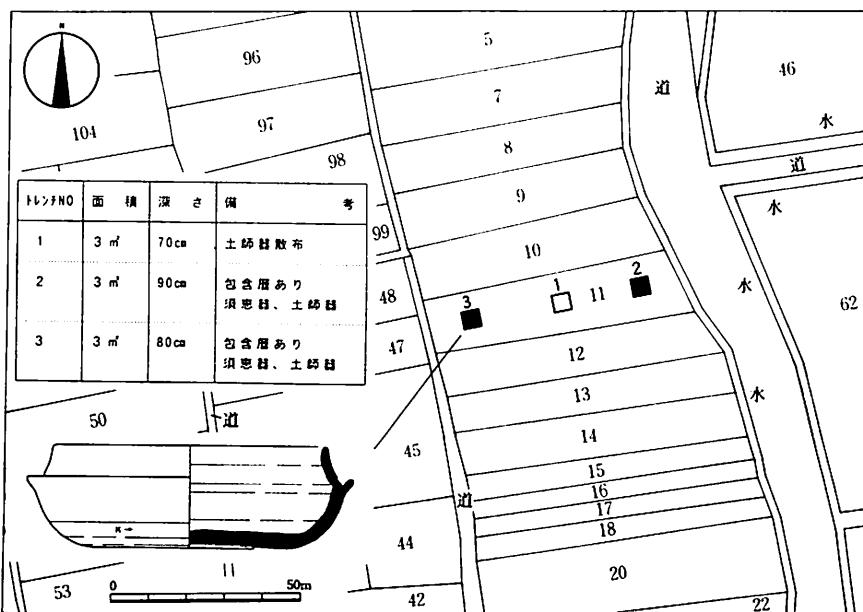
平成7年9月28日に羽咋市柳田町72-11字11番地（現況：畑）の土地所有者から個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の確認申請書が羽咋市教育委員会（以下：市教委）に提出された。

これを受けた市教委は、事業予定地が周知の寺家遺跡（第2図：遺跡No.07014）の範囲内であることから、同年10月5日、事業予定地（事業面積273m²）に3ヵ所（試掘面積合計9m²）の試掘坑を設定し、掘削機を使用して分布調査を行った。その結果、第3図に示すように第2.3トレンチから遺構及び遺物を確認し、ただちに土地所有者と発掘調査に関する協議を行った。以上の経緯を経て、市教委が事業主体となり、本調査は平成8年に実施することになった。

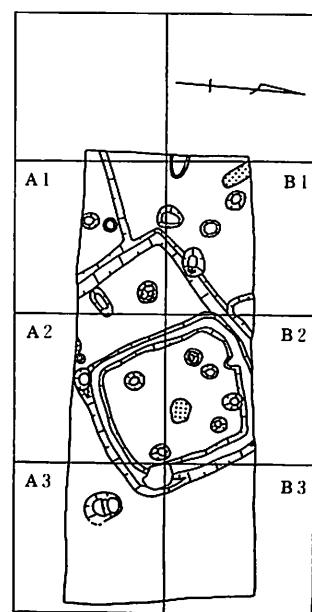
なお、広範囲の寺家遺跡で本調査区周辺は通称「砂山」と呼ばれていることで所在町名を入れて「柳田砂山地区」とした。

第2節 調査の経過（第3・4図）

住宅建設箇所にあたる約100m²を平成8年4月22日から6月8日まで延べ32日間にわたり発掘調査を実施した。調査区は5m間隔でグリッドを設定し南北方向にアルファベットを付し東西方向にアラビア数字を割り付けた。本遺跡は、包含層が畑作等により搅乱され、調査区及びその周辺の畑地表面には土器片が数多く散在している。次章での断面図（第9図）を参照していただき、調査区西側地表面でL=4.9m、東側地表面でL=4.2m、傾斜度3%を測り、地形は東へ緩やかに傾斜している。表土（耕作土）は深い所で、地表から約80cmまで達し、層が波状を呈している。次に焼土が部分的に残って堆積している黄橙灰褐色系の砂層が調査区西側には見られるが、東側はほとんど無く基盤層となる。また、表土が基盤砂層を掘り込んでいる部分も見受けられるために的確な層での遺構検出は極めて難しく基盤砂層（調査区西側基盤層L=4.2m、東側基盤層L=3.7m、傾斜度2%）までを掘り下げて確認した。



第3図 分布調査位置図 (1/1,000)



第4図 調査区グリッド割図 (1/120)

<調査日誌抄>

4月22日（月）晴

本日より現地調査開始。調査区を設定し、掘削機により調査区内の表土除去作業（地表から約50cm）を行う。発掘用資材も同時に搬入する。

4月23日（火）晴

発掘作業員が参加し、発掘用具の搬入を行う。仮設のグリッド杭（ピンポール）を設定後、調査区壁面の調整及び調査区の掘り下げを行う。

4月24日（水）晴

グリッド杭（木杭）の設定後、レベルの引き込み作業。調査区全区の掘り下げ及び遺構検出を行う。焼土（3カ所）・土器を検出。検出状況の写真撮影を行う。

4月25日（木）晴

調査区全区の清掃後、写真撮影を行う。平面図作成、水準測量を行い、その後、調査区AB1・2区の掘り下げ作業。銭貨出土。

4月26日（金）晴

焼土面出土の遺物を取り上げ後、焼土の掘り下げ、写真撮影、断面図作成を順次行う。

4月30日（火）晴

調査区全区の掘り下げ及び遺構検出。建物跡？、ピット、焼土検出。管玉出土。

5月2日（木）曇後雨

5カ所のセクションベルトを設定し、調査区を掘り下げる。新たに焼土を検出。午後より羽咋市立鹿島路小学校の先生と児童が遺跡の見学で来跡する。

5月7日（火）曇

調査区全区の掘り下げと並行して焼土の写真撮影、平面図作成を行う。

5月8日（水）曇時々雨

調査区全区の掘り下げ及び遺構検出を行う。切り合う2棟の建物跡を検出。しかし、切り合い不明。2号建物の中央に位置する新たな焼土（炭化物を含む）を検出。炉跡？

5月10日（金）曇後晴

調査区全区の清掃及び壁面調整（4辺）後、写真撮影を行う。1・2号建物より管玉、紡錘車が出土。

5月13日（月）雨

2号建物の掘り下げを行うが雨のため午後より調査を中止する。

5月14日（火）晴

天候が良く風があるため飛砂が著しく灌水作業と並行して、2号建物の掘り下げを行うが、炉跡及び周辺からの土器出土量が多く作業が捗らない。臼玉出土。

5月15日（水）晴

1・2号建物掘り下げを行う。1号建物に隣接する焼土の清掃後、写真撮影。その後、平面図作成、水準測量、断面図作成を行う。掘り下げに伴いグリッド杭の露出が著しく杭の打ち直しを行う。

5月16日（木）晴

調査区全区の掘り下げ及び遺構検出を行う。2号建物（2・3号建物）が切り合っていることが判明する。1・2号建物より臼玉各3個出土。排土をフルイにかけ臼玉2個確認する。以後、掘り下げを行った際の排土はフルイにかけれる。

5月17日（金）晴

平面図作成（出土遺物）。



表上除去作業



遺構検出作業風景

5月20日（月）曇時々雨

平面図にレベルを転記する。

5月21日（火）曇

遺構内の遺物取り上げ作業を行い、その後、焼土の掘り下げ、断面の写真撮影、調査区全区の清掃を行う。

5月22日（水）曇時々雨

シート上の排水作業を行った後、切り合う1・2号建物の検出作業を行う。銅片・鉱滓出土。セクションベルトによる堆積状況の確認をする。

5月23日（木）晴

3号建物内の精査を行う。壁溝・柱穴を検出。排土より白玉・銅片を確認する。

5月24日（金）晴

調査区全区の清掃後、写真撮影を行う。その後、遺構掘り下げを行う。

5月25日（土）晴

セクションベルトの断面図作成を行う。

5月27日（月）晴

3号建物内の遺構掘り下げを行う。

5月28日（火）晴

3号建物内の精査、掘り下げ、遺構断面の写真撮影を行う。

5月29日（水）曇

セクションベルト除去作業を行い、その後、1・2号建物の精査。検出した遺構は掘り下げ、写真撮影を行う。

5月30日（木）曇

昨日に引き続きセクションベルトの除去作業を行う。1・2号建物内の遺構断面図作成及び写真撮影を行う。午後より文化財保護審議会委員現地視察。

5月31日（金）曇

断面図作成を終了した遺構は順次完掘する。

6月3日（月）曇

セクションベルト内から出土した遺物の平面図作成及び遺物の取り上げ作業を行う。調査区北・西側壁面のライン引き。掘り残した遺構の写真撮影、断面図作成、完掘を順次行う。

6月4日（火）曇

ピット1の掘り下げ、断面の写真撮影、断面図作成を行う。ピット1からは埋納した完形の壺が出土する。また、遺構出土の遺物取り上げ作業を行い、作業終了後、調査区全区を清掃し、完掘状況の写真撮影を行う。

6月5日（水）晴

調査区北・西側壁面の断面図作成を行う。風が強く飛砂に悩まされる。

6月6日（木）晴

昨日に引き続き壁面の断面図作成及び調査区AB2・3区の平面図作成を行う。午後より現場で記者発表を行う。

6月7日（金）晴

調査区AB1区の平面図作成。3号建物内炉跡の掘り下げ及び写真撮影、断面図作成。調査区及び周辺の平板測量。発掘用具の荷造り、運搬作業。

6月8日（土）曇後雨

発掘用資材の撤収と並行して重機による調査区の埋め戻し作業。本日をもって現場での発掘調査を終了する。



文化財保護審議会委員来跡



埋戻し作業

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物

1. 焼土（第5図 図版第2・3・4）

第5図は第1層の表土を除去した後の黄橙灰褐色系砂層上面に堆積する焼土の分布範囲を示し、調査区西側から7カ所確認した。調査区東側については表土が基盤層を掘込み攪乱しているため焼土面は残っていない。焼土は大きいもので長径約120cm、短径約100cmの幾何学的形を呈し、深さはいずれも浅く約10cm前後の黄橙褐色砂質土からなる。

出土遺物

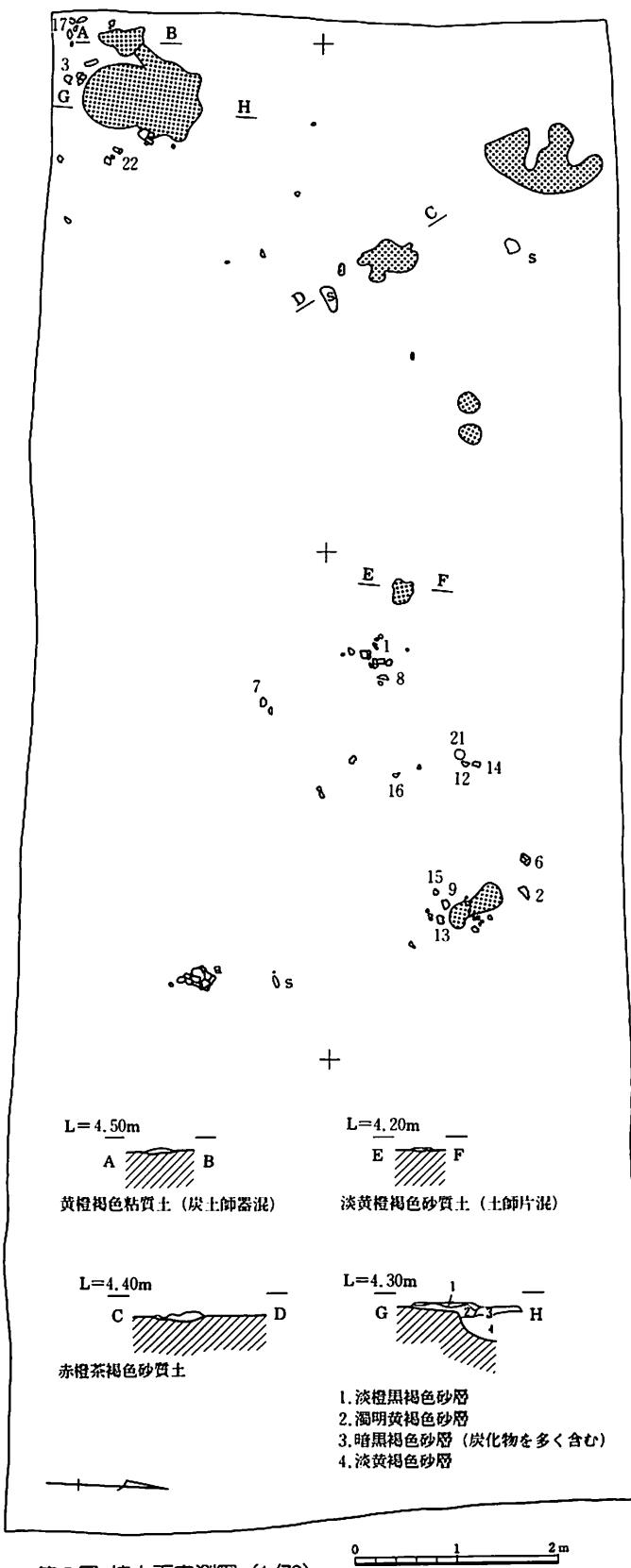
畑の耕作により表土が著しく攪乱され平面的層序の判断が困難であることからの確な層の判別はできなかった。出土土器は焼土及びその周辺からのもので全体的に出土量は少なく、須恵器と土師器を合わせても図化したのは合計で22点にすぎない。

須恵器（第6図1～4）

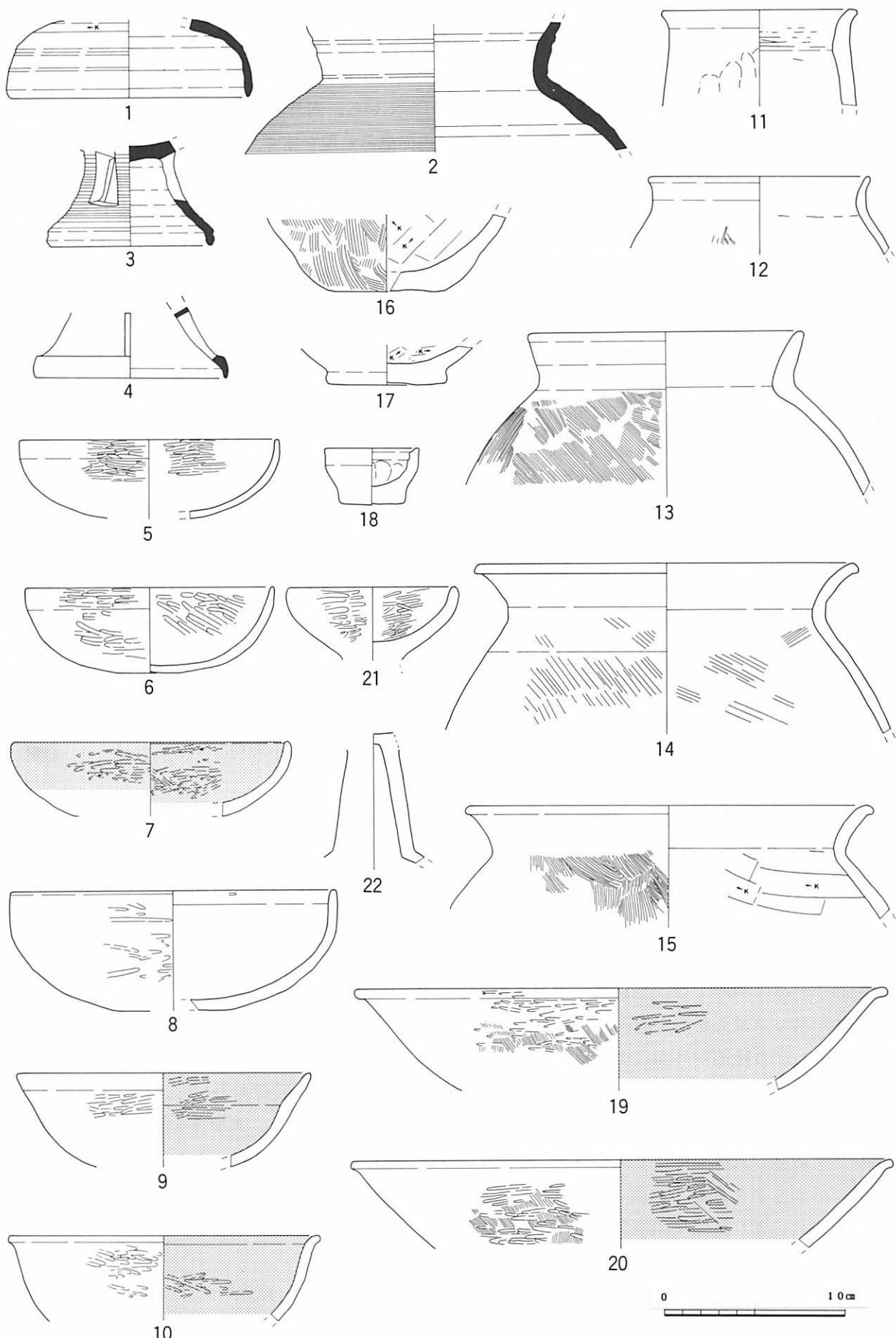
1は壊蓋で口径13.0cmを測り全体的に稜が不鮮明で、天井部をヘラケズリ調整し口縁唇部は先細りする。2は口縁部を欠損している壺で頸部径12.2cmを測る。頸部には2条の浅い沈線をもち、肩部から体部にかけてカキメ調整を施す。3・4は高壺の脚部で共に三方透かしを有する。3は底径8.8cmを測り端部に弱い段をもち丸く納め、外面をカキメ調整し内面はナデ調整を施す。4は底径10.2cmを測り端部は先細りし内外面をナデ調整している。

土師器（第6図5～22）

5～10・19・20は塊形土器で口径13.5cmのものから29.0cmのものまで各種（14・16・29cm前後）みられ、口縁端部を丸く納めるもの（5～10）と面取りしているものの（19・20）がある。



第5図 焼土面実測図 (1/70)



第6図 焼土及びその周辺の出土遺物実測図 1 (1/3)

5～8は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は直立する。9は内面の体部と口縁部の途中で屈曲し内碗気味に立ち上がり、口縁部は外側に伸びる。10は口縁端部が短くやや外反している。19と20は同一個体で、口縁唇部を外方に屈曲し、面取りしている。内外面はいずれも丁寧にミガキ調整が施されている。7は内外面を赤彩し、9・10・19・20は内面黒色処理を施す。11～15は甕形土器で口径10.0cmのものから20.0cmのものが見られる。11は口径10.4cmを測り口縁部がやや短く外反し、口縁端部を面取りしている。内外面をナデ調整し体部外面には縦方向に指でナデた跡が残る。12～15は「く」の字口縁をもつ。12は口径11.9cmを測り頸部で緩く屈曲し直立気味に外反して伸びる比較的短い口縁部をもち、内外面をナデ調整している。13は口径14.8cmを測り頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸びる口縁部をもち、口縁唇部を丸く納め、外面をハケ調整、内面をナデ調整している。14・15は口径22.0cm前後を測り、頸部で鋭く屈曲しやや直立気味に伸びて上方で外反する。調整は外面をハケ調整し、内面をナデもしくはケズリ調整を施す。16・17は底径6.0cm前後を測る底部である。18は口径5.1cm、底径3.6cm、器高3.0cmを測る手捏土器である。21は口径9.1cmを測る小型の高壺の壺部で、内外面をミガキ調整している。22は高壺の脚柱部で焼きがあまく内面はナデ調整しているが外面は磨耗が著しく調整は不明である。

2. 1号堅穴式建物（第9・10図 図版第5・8）

建物跡の中では最も古く調査区西側に位置する堅穴式建物である。北西側は調査区から外れ、また、南東側は2号堅穴式建物により切られ全容は不明である。検出面からの深さは35cm前後を測り、床面の標高は3.8m、床面からの深さ7cm程の壁周溝が見受けられる。主柱穴と思われるピットを1基検出する（ピット5）。径は約90cmの不定形な橢円形を呈し、深さ約55cmを測る。調査区北西端に位置し、1号堅穴式建物の中央部には焼土面を確認しており、炉と思われる。建物内覆土は一部攪乱を受けているが、茶褐色系と基盤層の砂が汚れた濁黄褐色系の砂層が堆積している。

出土遺物（第7図23～41 図版第13）

須恵器（23・24）

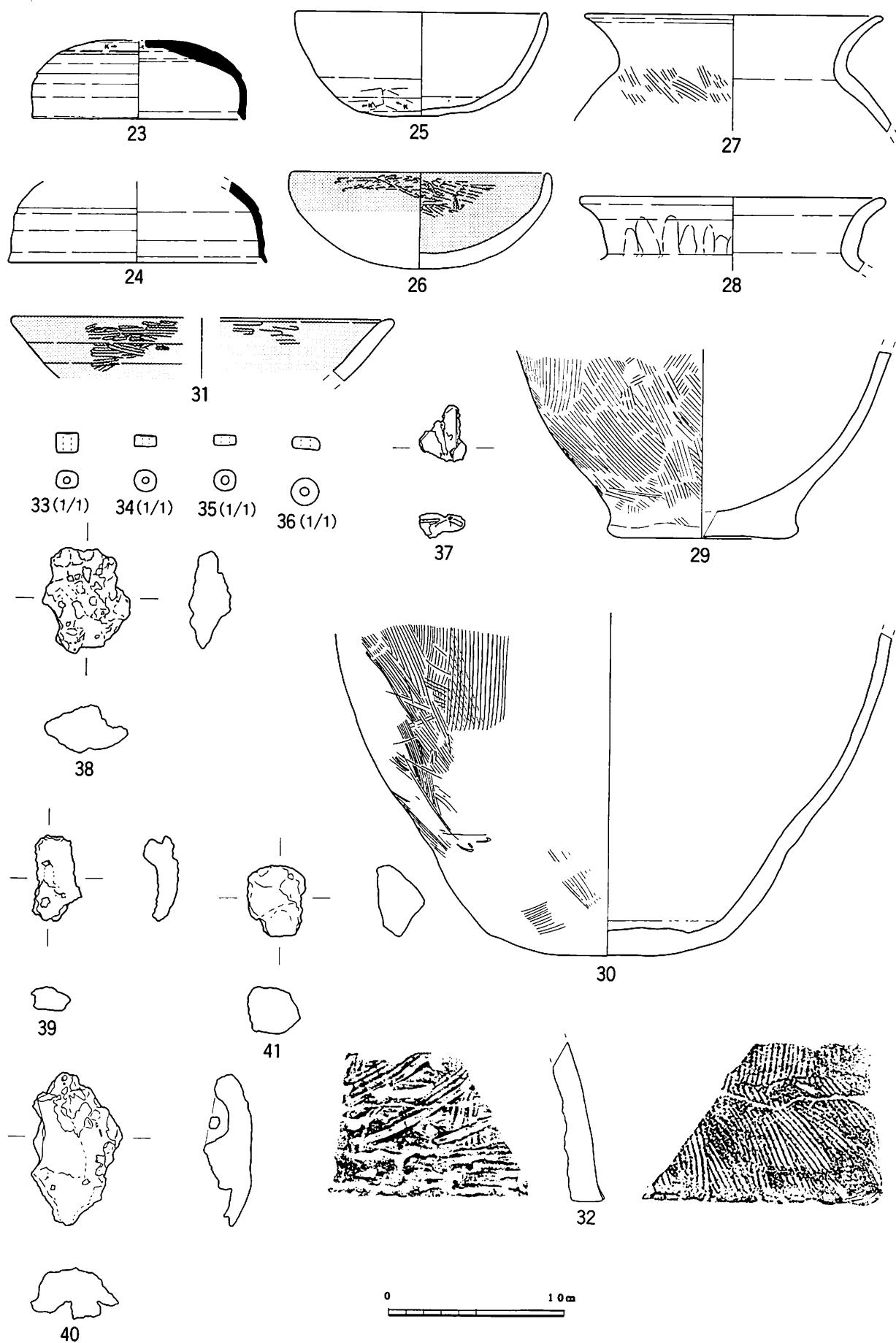
23・24は壺蓋で、23の口径11.6cm、24の口径14.0cmを測る。天井部と口縁部の稜がやや不鮮明で、全体的にナデ調整を施す。23の天井部はケズリ調整を比較的丁寧に仕上げ外面には少々の降灰が付着し暗緑灰色を呈する。

土師器（25～32）

25・26・31は壺形土器で口縁唇部を丸く納め、丸底の底部に浅い体部をもつ。25・26は口径14.0cm前後を測り口縁部がやや内湾して伸び、31は内湾気味に開く口縁部をもつ。25は底部外面をヘラケズリ調整し、口縁部内外面はナデ調整を施す。26・31は内外面をミガキ調整し赤橙褐色を呈する。27・28は甕形土器で、口径16.0cm前後を測り、27は口縁部が頸部で強くくびれ外反し、28は直立気味に伸び、先端で外反する。27は外面をナデ、ハケ調整、内面をナデ調整し、黄橙色を呈する。28は外面をナデ調整し口縁部に指圧痕を残す。29・30は底部である。29は底径10.0cm、30は底径8.4cmを測り、共に外面をハケ調整し内面をナデ調整している。32は移動式竈の底部で、外面をハケ調整、内面をヘラ状具により粗雑な調整を行っている。

臼玉・軽石（33～36・41）

33～36は滑石の臼玉で計27個が出土している。長さ0.2～0.3cm、直径0.4～0.5cm、重さは最も大きいもので0.1gを測る。41は軽石である。



第7図 1号竪穴式建物出土遺物実測図 2 (1/3)

鉄製品・鉱滓（37～40）

37は鉄製品で板状のものが3点錆により付着している。38～40は鉱滓である。

3. 2号堅穴式建物（第9・10図 図版第5・7・8・9）

調査区中央に位置し、3号堅穴式建物により切られ、また、調査区の南北側からやや外れているが、N-47°-Eに主軸をもった東西方向に隅丸長方形を呈する堅穴式建物である。検出面からの深さ約30cm前後、床面の標高3.7mを測る。床面からの深さ3～5cm、幅40～60cm程の浅い壁周溝が北西側壁面に一部確認される。主柱穴と思われるピットが4基（ピット6・7・11・13）検出されたが1基は半分が調査区外にあたる（ピット7）。径は約60～70cmの略円径を呈し、深さ約60～80cmを測る。建物内覆土は黄褐色系の砂層が堆積している。

出土遺物（第8図 図版第14・15）

須恵器（42～46）

42は口径12.3cmを測る壺蓋で全体的に鮮明な稜をもち、口縁端部には弱い段を有し、天井部はヘラケズリ調整を施す。43・44は口径8.0cm前後を測る壺の口縁部で、直線的に外展して長く伸びる。43は口頸部に2条の浅い沈線をめぐらし、その中を波状文が施されている。44は同じく口頸部に2条の平行する沈線の中をやや右上がりの縦方向の刺突文が施されている。43は内面に44は外面に自然釉が付着している。45は口径6.8cm、体部径8.7cm、体部高5.1cmを測る小型の壺である。口頸部は垂直に立ち上がり、肩部の張り出しあは上位にあり、底部はケズリ調整を施す。46は口径19.0cmを測る中型の甕である。頸部を鋭く屈曲しやや直立気味に伸びて端部を丸く納め、口縁部外面に2本の凹線が平行し肩部に縦方向の刺突文が見られる。

土師器（47～59）

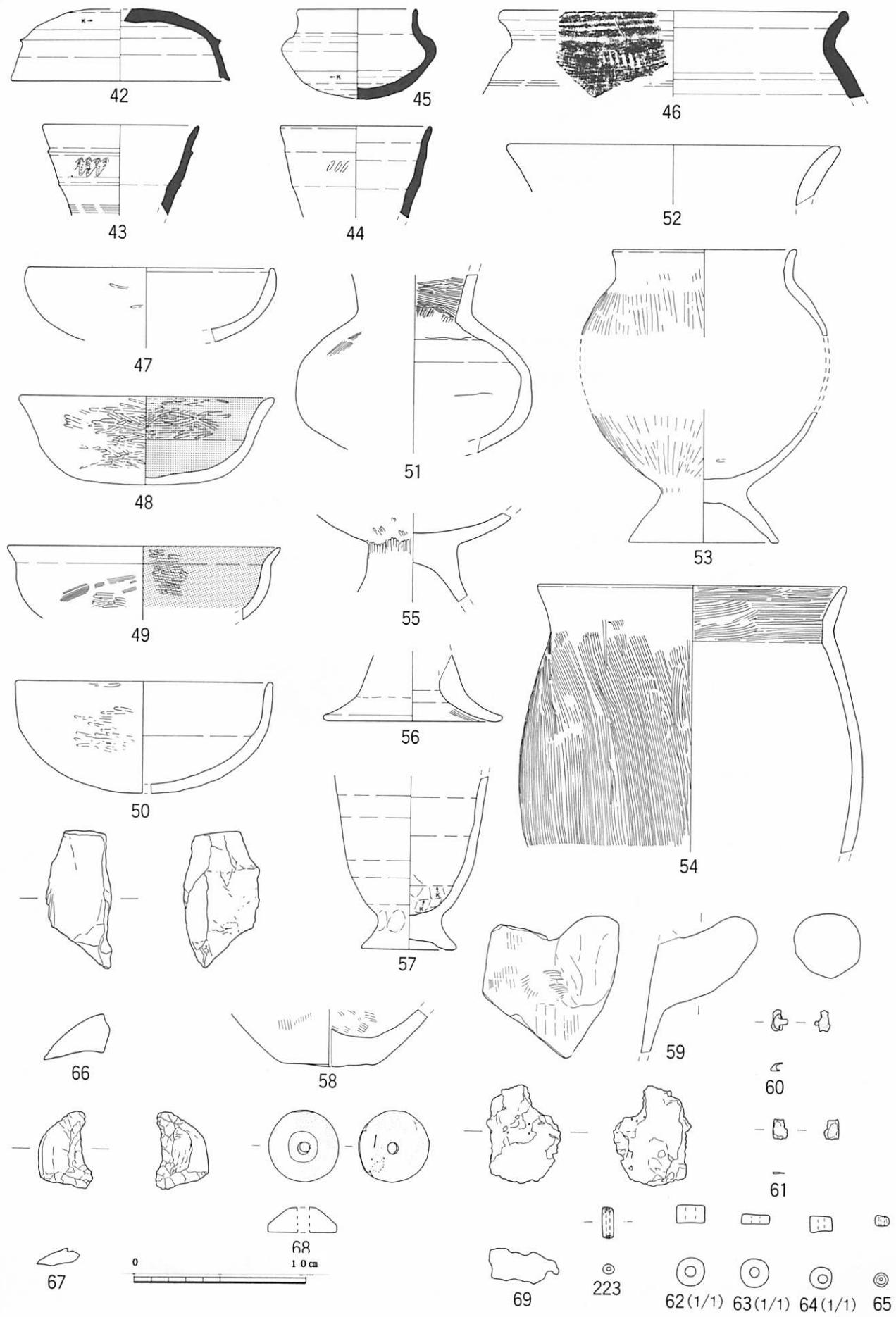
47～50は口径14.0cm前後の壺形土器である。47・50は口縁部が内湾して伸び口縁唇部を丸く納めたもの。48・49は体部の途中で屈曲し外反して伸びる口縁部をもち、口縁部は比較的長いもの（48）と短いもの（49）がある。内外面はミガキ調整し、48・49は内面黒色処理を施す。51は頸部径6.4cm、体部径13.3cmを測る壺の体部である。52～54は「く」の字口縁をもつ甕形土器で、52・54は口径18.0cm前後、53は口径10.2cm、底径8.3cmを測る台付き甕である。調整は共に外面をハケ調整、内面をナデ調整を施す。55・56は高壺形土器で、56は底径10.1cmを測る脚裾部である。57は倒盆形脚台の製塩土器で、底径5.4cmを測る。内外面を粗雑なナデ調整、脚部外面に指圧痕、底部内面はケズリ調整を施す。59は甕形土器の把手で、調整は指頭によるオサエとナデ調整が見られる。

銅製品・ガラス玉（60・61・65）

60は鏡の中央に位置する把手部分である。61は銅板片である。共に表面を青鏽が付着する。65はコバルトブルーのガラス玉である。長さ0.6cm、直径0.8cm、孔径0.1cm、重さ0.6gを測る。

管玉・臼玉・スクレイパー・紡錘車（223・62～64・66～68）

223は緑色凝灰岩の管玉で長さ1.7cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、孔径0.2cm、重さ1.2gを測る。62～64は滑石の臼玉で計23点が出土した。66は重さ73.8gを測る剥片で打撃痕を残す。67は両刃をもつスクレイパーで長さ4.5cm、幅0.3cm、厚さ0.9cm、重さ12.0gを測る。68は滑石の紡錘車で直径4.1cm、厚さ1.4cm、孔径0.7cm、重さ31.8gを測る。69は鉱滓である。



第8図 2号竖穴式建物出土遺物実測図 3 (1/3)

4. 3号堅穴式建物 (第9・10図 図版第6・9・10)

調査区中央に位置し、調査区北側からやや外れているが N-60°-E に主軸をもった隅丸方形を呈する堅穴式建物である。検出面からの深さ約50cm 前後、床面の標高3.5m を測る。床面からの深さ 7~10cm、幅40~80cm の壁周溝が廻り、主柱穴と思われるピットが4基(ピット8・9・10・11) 検出された。径は約60~70cm の略円径を呈し、深さ約30~60cm を測る。3号堅穴式建物の中央部には炉を検出し黄灰褐色系の砂層(炭化物含む)が堆積する。建物内覆土は黄褐色系の砂層が堆積しており、建物が廃絶した後に土器と共に貝(シジミ・ハマグリ・マキ貝など)、焼土を一括投棄している。貝については、一部攪乱のものと含み、詳細な種類は調べなかった。

出土遺物 (第11~16図 図版第15~18)

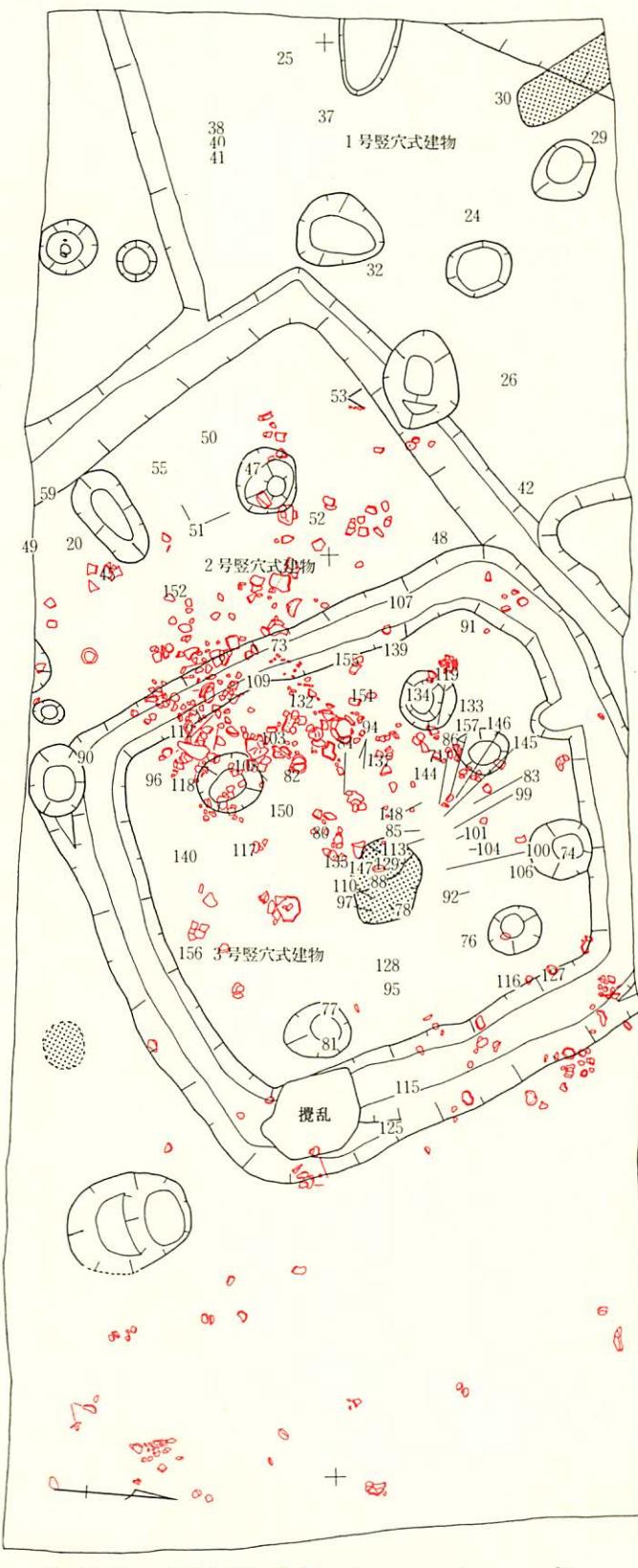
須恵器 (70~76)

70~72は壺蓋で、口径13.0cm 前後を測る。口縁部と天井部の境の稜がはっきりしているもの(70)と不鮮明なもの(71・72)がある。口縁端部はいずれも弱い段をもって内傾する。70・72は端部先端が比較的鋭いが71は丸みをおびる。71は天井部にヘラケズリ調整を施す。73・74は壺身で口径11.0cm 前後を測る。口縁部は受部の立ち上がりが長く内傾し、口縁端部に内傾する面をもち、口縁部高2.0cm 近くを測る。受部は水平に伸びるもの(73)とやや上方に伸びるもの(74)がある。底部はヘラケズリ調整を施し、焼成はあまく黄灰色を呈する。75はボタン形のつまみ部である。76は甕の体部片で外面は平行タタキ調整を行い、内面は同心円あて具痕である。

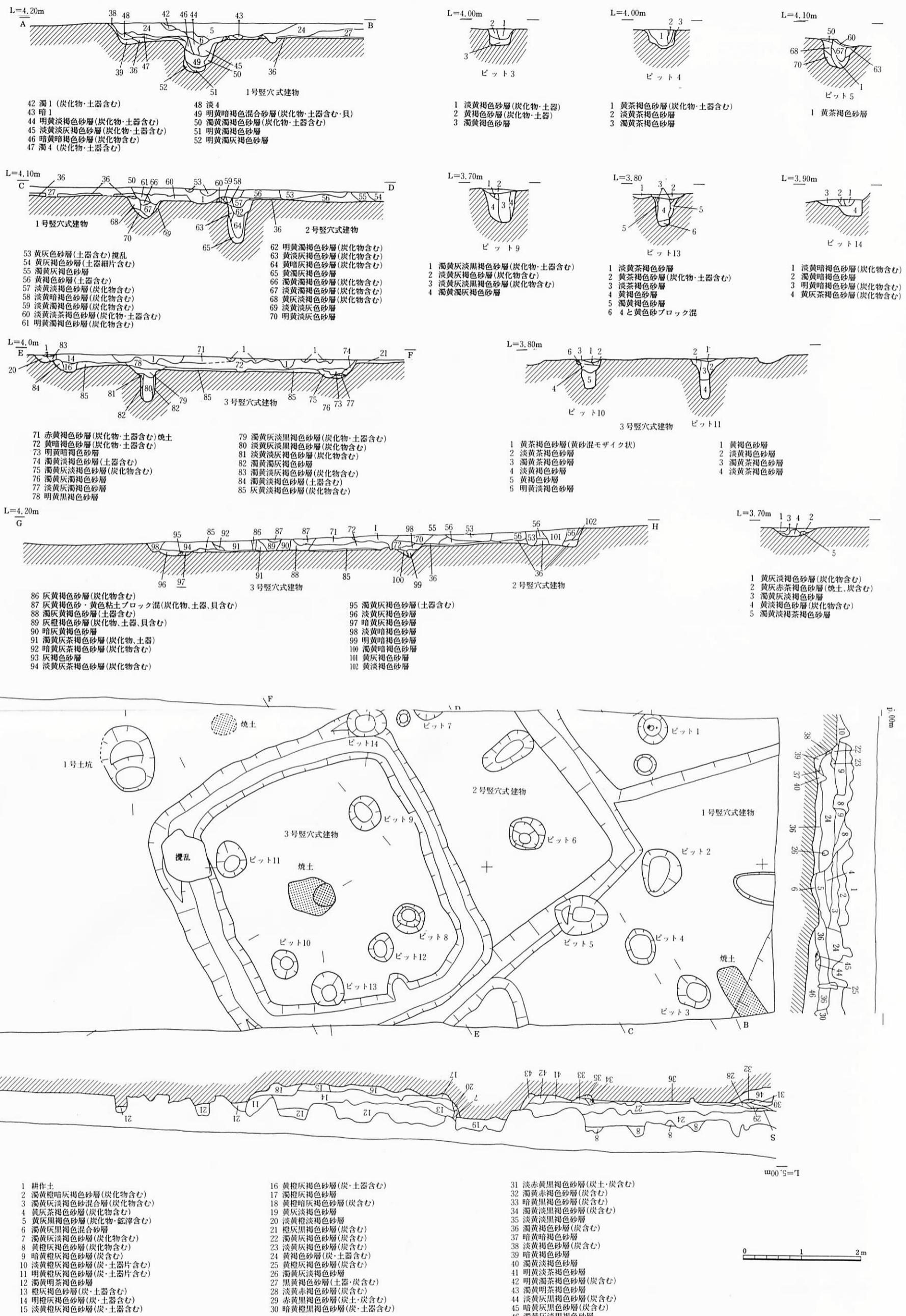
土師器 (77~157)

壺 (77~111・145~147・149・150)

口径は14.0cm 前後の中型のものが多く、最も大きいもので口径25.2cm のものまで



第9図 出土遺物実測図 (1/70) 0 1 2m



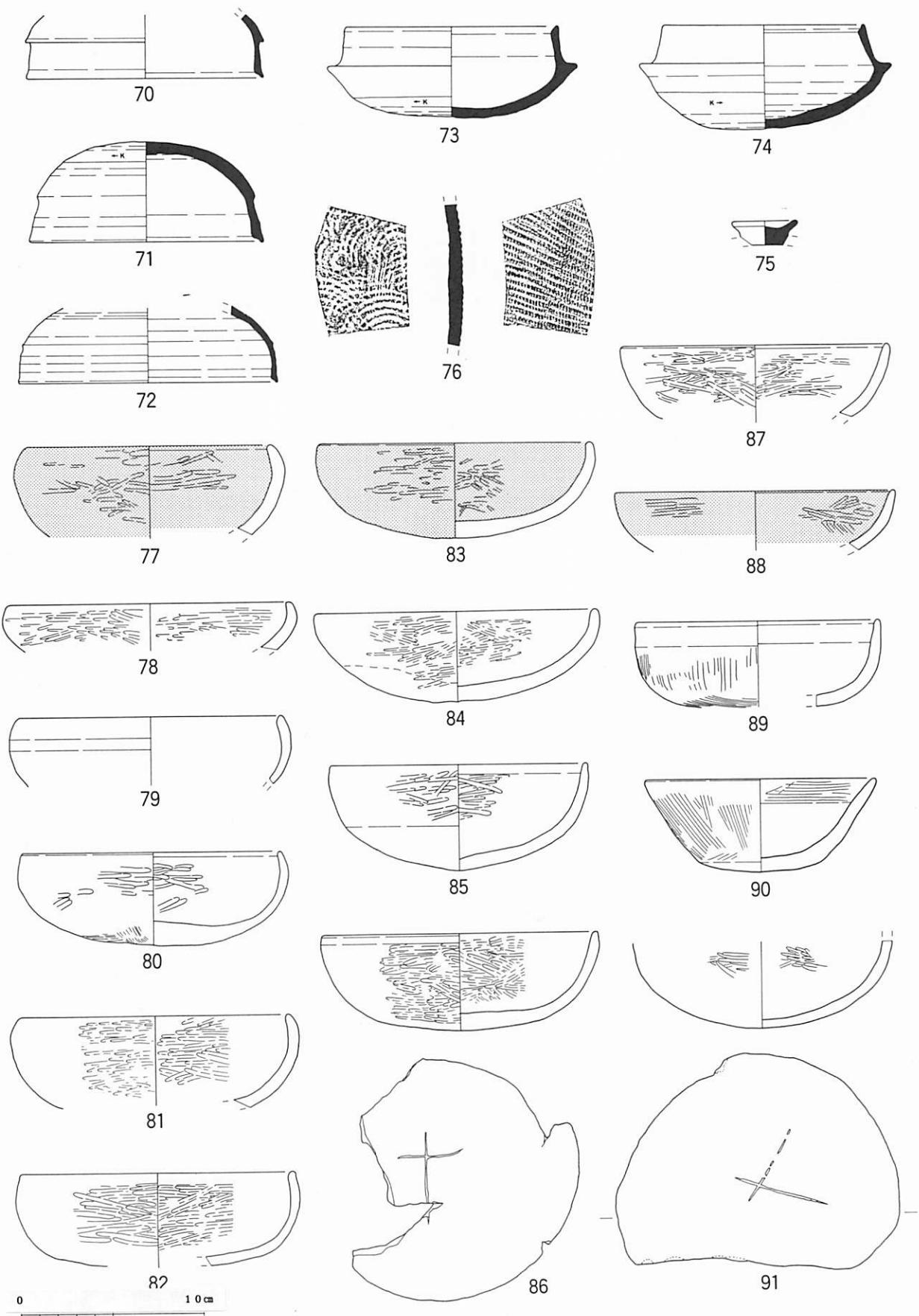
各種見られる。77~89は丸底の底部に浅い体部をもち、口縁部が内湾して伸び、口縁唇部を丸く納める。80は厚い底部をもつ。内外面は丁寧なミガキ調整を施し赤彩され赤橙色を呈するもの(77·83·88)と黄橙色を呈するものが見られる。89は外面をハケ調整し、内面はハケ調整後ナデ調整を施す。90·149·150は直線的口縁部をもち、90は体部下半で屈曲し直線的に伸びる口縁部をもつ。外面を縦方向のハケ調整、内面はナデ調整し、口縁部にはハケ調整痕を残す。149は口径25.2cm、150は口径16.3cmを測り、内外面は共にミガキ調整を施す。86·91の底部にはヘラ状具により「十」字の沈線が描かれている。92~111は浅い塊形の体部と、途中で屈曲し内湾気味に外方に伸びる口縁部をもつ。92~103は口縁部が比較的長く、104~111は口縁部が比較的短い。調整はいずれも内外面ミガキ調整をし、94~97·99·100·103·109は内面黒色処理を施す。110は底部が厚く底径5.7cmを測り、内外面を粗雑なナデ調整を施す。145~147は口径13.0cm前後を測り、145·146は浅い塊形の体部と途中で屈曲し内湾気味に外方に伸びる短い口縁部をもつ。147は比較的浅いすり鉢状の体部と内湾気味に開く口縁部をもち、口縁唇部はゆるく外反し先細りする。外面をミガキ調整し、一部ハケ調整痕を残す。内面は口縁部ミガキ調整、体部ナデ調整を施す。

壺 (112~115·148)

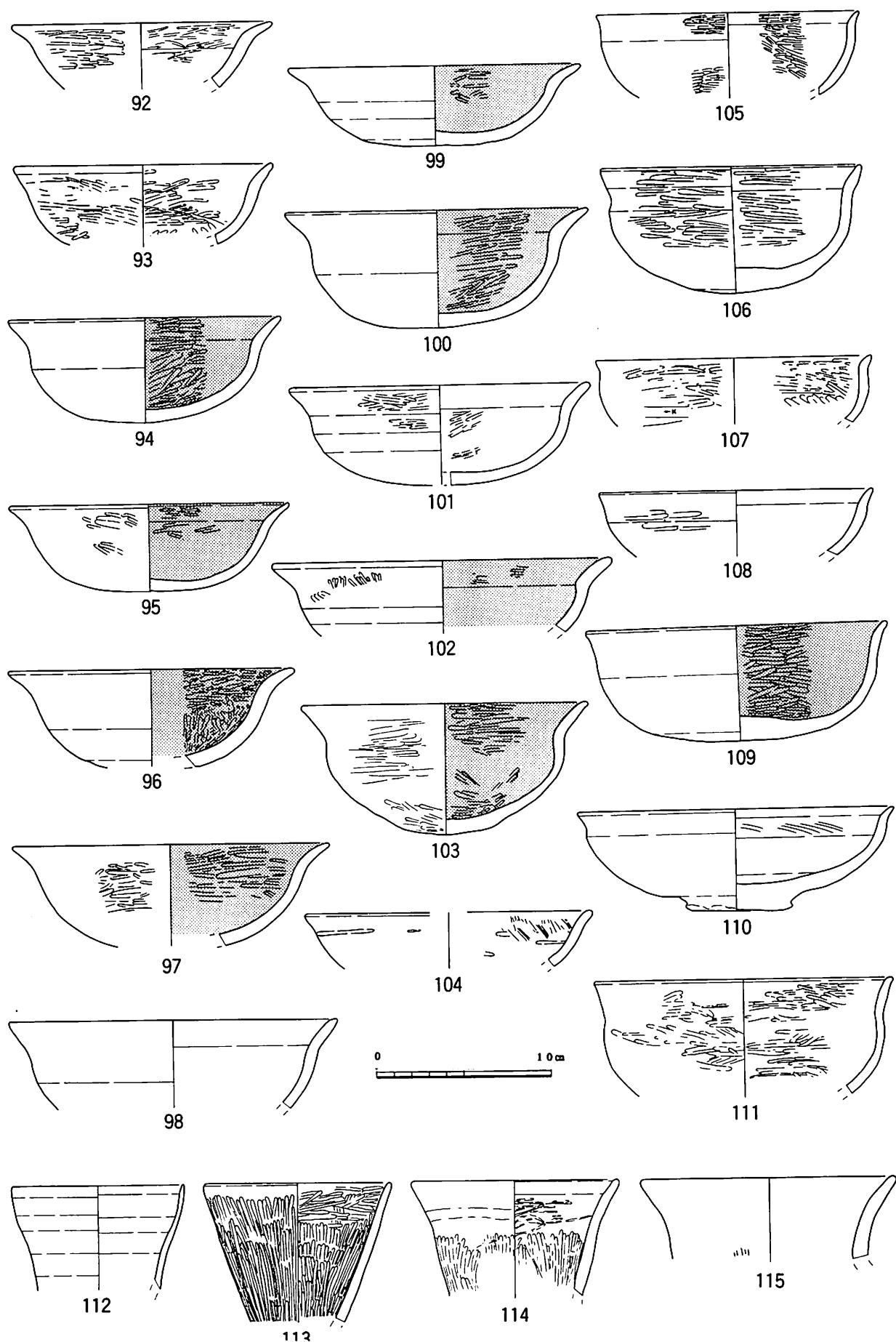
112は口径9.4cmを測り口縁部が内湾気味に伸び、口縁唇部は細く丸め器肉はやや薄い。113·114は口径11.0cm前後を測り、口縁部が比較的長く直線的に伸び口縁唇部は丸く納める。内外面は丁寧なミガキ調整を施し赤橙色を呈する。115は口径13.6cmを測り、口縁部が外反気味に伸び口縁唇部を丸く納め、112·115は内外面をナデ調整している。148は口径11.9cm、頸部径11.1cm、体部径12.9cm、底径4.2cm、体部高8.4cm、頸部高1.8cm、器高10.2cmを測り、丸い体部に内湾気味に開く口縁部をもつ。内外面共に比較的丁寧なヘラミガキ調整を施す。

甕 (116~144)

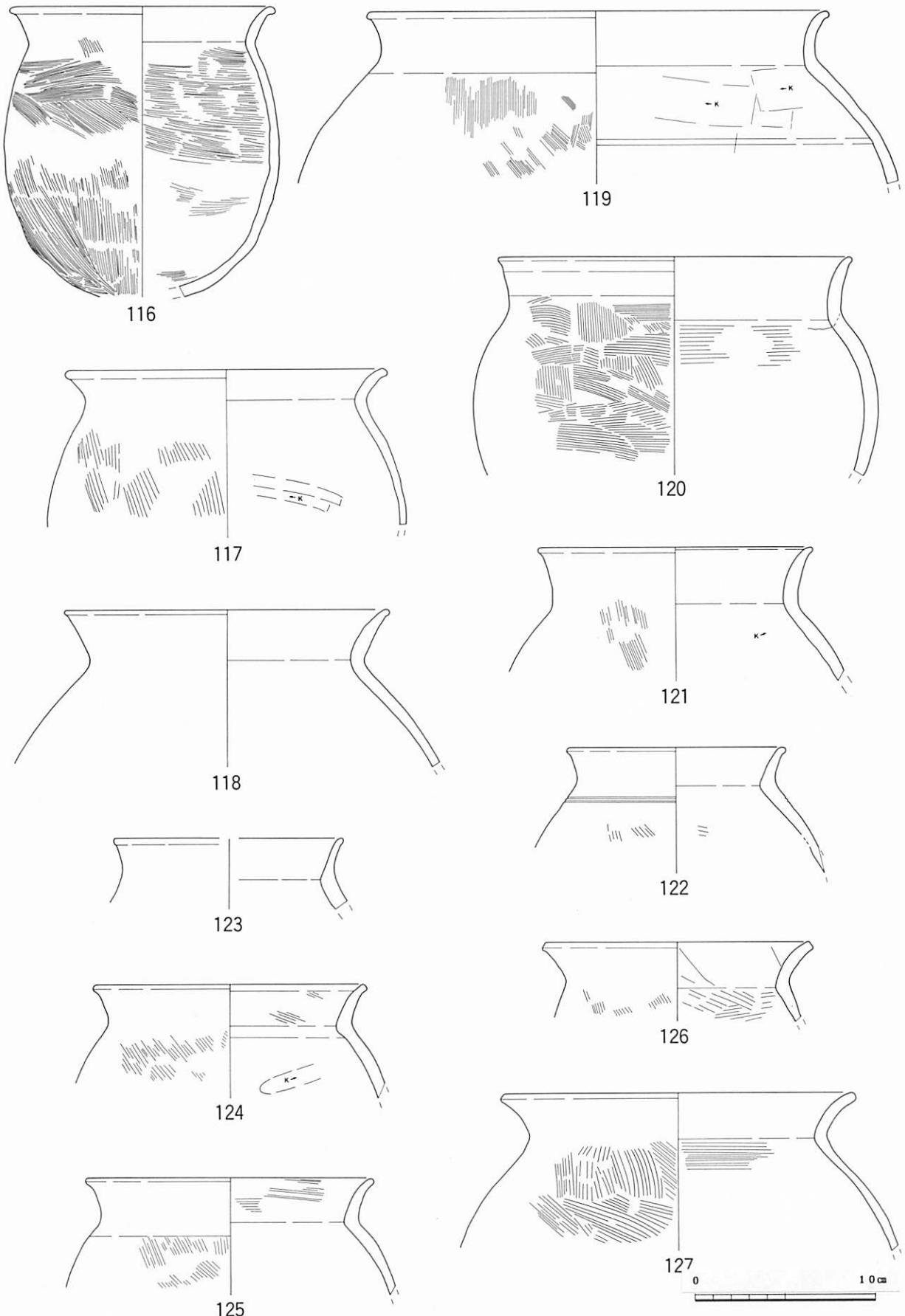
口径は11.7cmのものから24.8cmのものまで各種みられ、最も多くみられるのは15.0cm前後のもので、次に17.0cm前後のものになる。116~123は頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸びて上方で外反する口縁をもち、口縁唇部をやや引き出し丸く納める。118·120·121は口縁部がやや長く先細りしている。122·123は頸部から直線的に伸び、122は肩部に沈線が平行して2条みられる。124~131は口縁唇部を面とりし、124·125は他のものに比べ口縁唇部をやや細く仕上げている。130·131は頸部が緩やかに外反し、直線的に伸びる口縁部をもつ。調整は外面をハケないしナデ調整、内面はナデまたはケズリ、ハケ調整がみられる。132~142は口縁唇部を丸く仕上げ、132~134は頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸びて上方で外反する口縁部をもつ。外面はハケ調整、内面はやや磨耗気味であるがナデ調整を施す。135·136は頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸び口縁端部で少々内向する。137は口縁端部先端をつまみ上げ狭い口縁帯をもち、138は口縁唇部で外反している。135~137は外面ハケ調整、内面ケズリ調整を施す。138は外面ハケ調整後、ナデ調整、内面ハケ調整を施す。139·140は頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸びる短い口縁部をもつ。139は外面ハケ調整、内面はケズリ調整を施す。140は外面をハケ調整し体部下方をケズリ調整、内面体部上半をナデ調整し下半をケズリ調整している。141·142は頸部で緩やかに外反し比較的短い口縁部をもつ。141は内外面共にハケ調整。142は外面ハケ調整、内面体部上下端をハケ調整し、中位をケズリ調整している。143·144は底部で、143の底径6.0cm、144の底径13.8cmを測る。143は内外面をハケ調整し、144は外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ調整を施す。



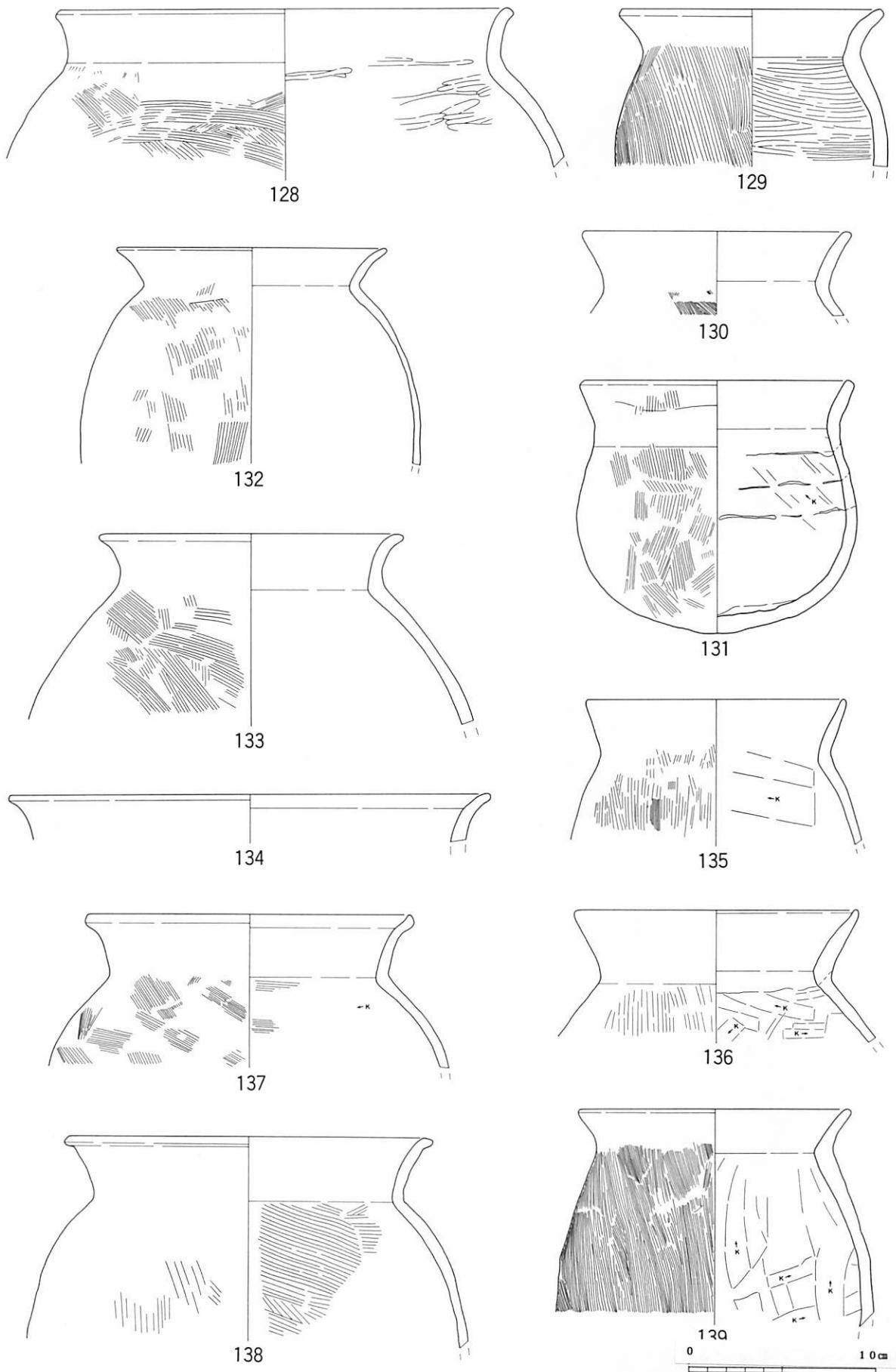
第11図 3号竪穴式建物出土遺物実測図 4 (1/3)



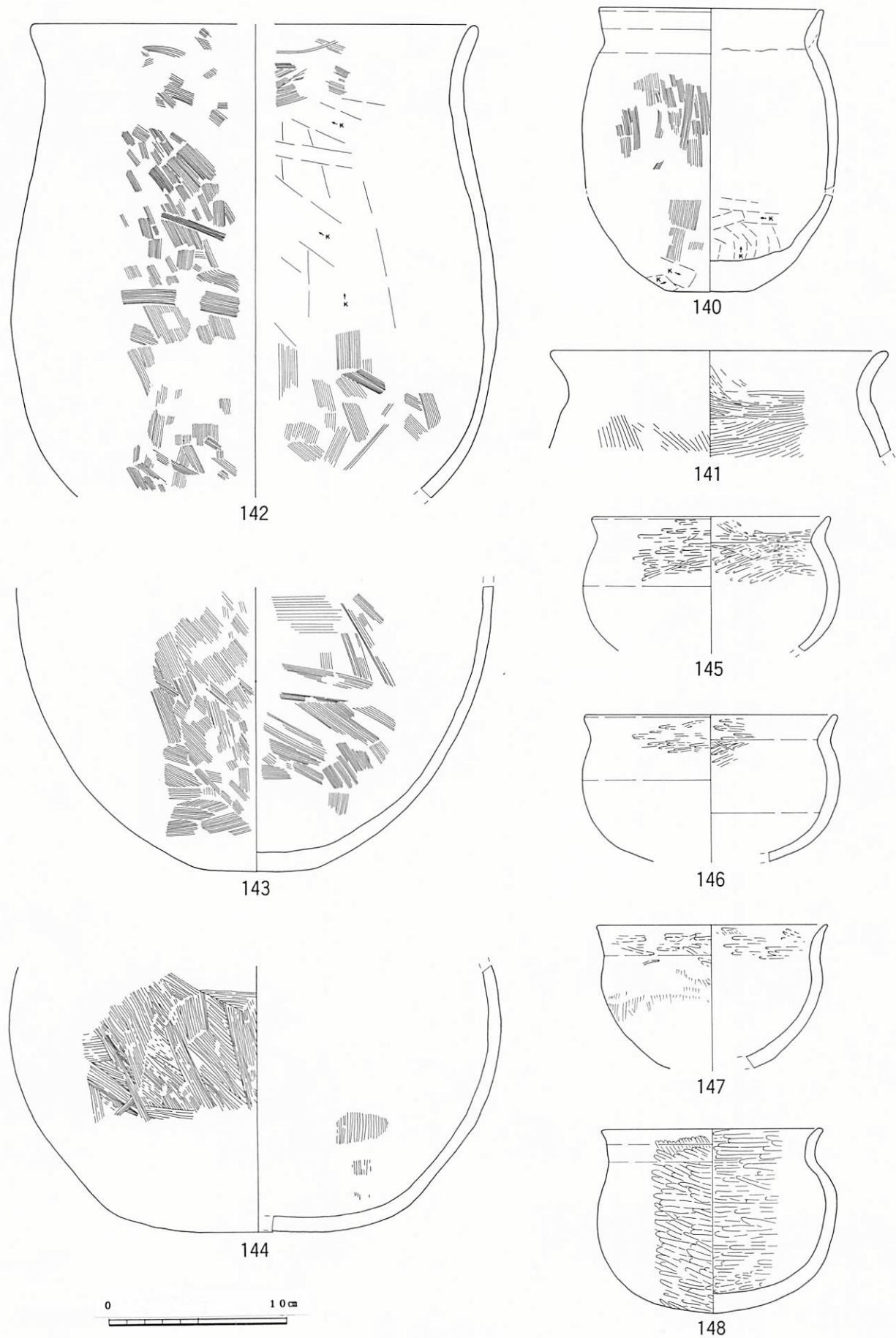
第12図 3号竪穴式建物出土遺物実測図 5 (1/3)



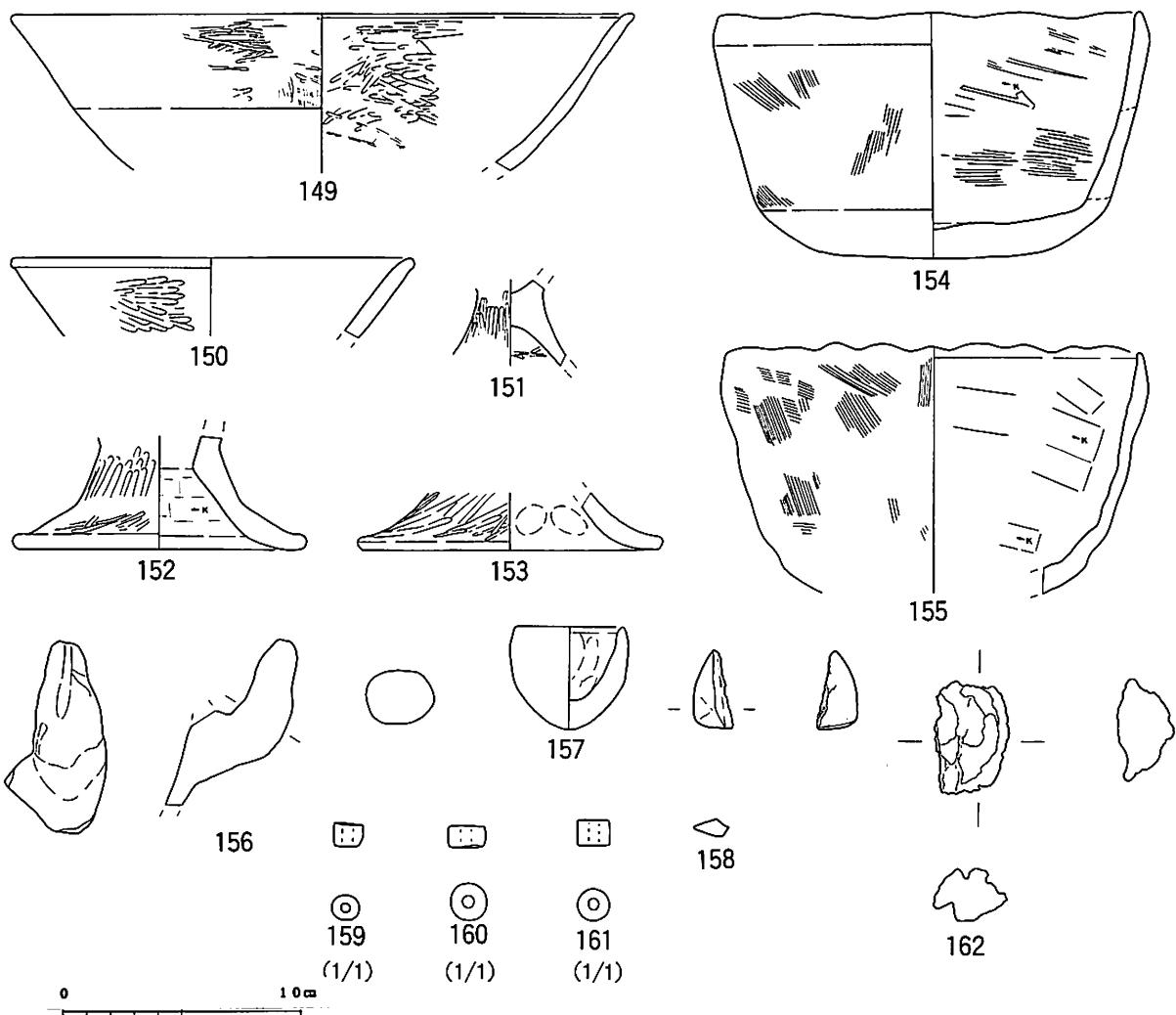
第13図 3号竪穴式建物出土遺物実測図 6 (1/3)



第14図 3号竪穴式建物出土遺物実測図 7 (1/3)



第15図 3号竪穴式建物出土遺物実測図 8 (1/3)



第16図 3号竪穴式建物出土遺物実測図 9 (1/3)

高坏 (151~153)

151~153は高坏の脚部で、底径12.0cm 前後を測る。外面は共にミガキ調整を施し、内面を152はケズリ調整、153はナデ調整を施し一部指圧痕が残る。

製塩土器 (154·155)

両者波状口縁部をもつ製塩土器である。154は口径16.8cm、体部高10.0cm、底径8.8cm を測り、155は口径16.8cm を測る。調整は両者共に粗雑で外面ハケ調整、内面ケズリ調整を施す。

瓶、手捏土器 (156·157)

156は瓶土器に付く把手で、調整はオサエ、ナデ調整を行っている。157は口径4.4cm、底径0.6cm、器高4.2cm を測る手捏土器で外面ナデ調整、内面オサエ、ナデ調整を施す。

石製品・鉱滓 (158~162)

158は両刃をもつ磨製の石斧の端部と思われる。長さ3.2cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ3.7gを測る。159~161は滑石の臼玉で計22個が出土している。長さ0.2~0.3cm、直径0.3~0.5cm、重さ0.1gを測る。162は重さ17.6gを測る鉱滓である。

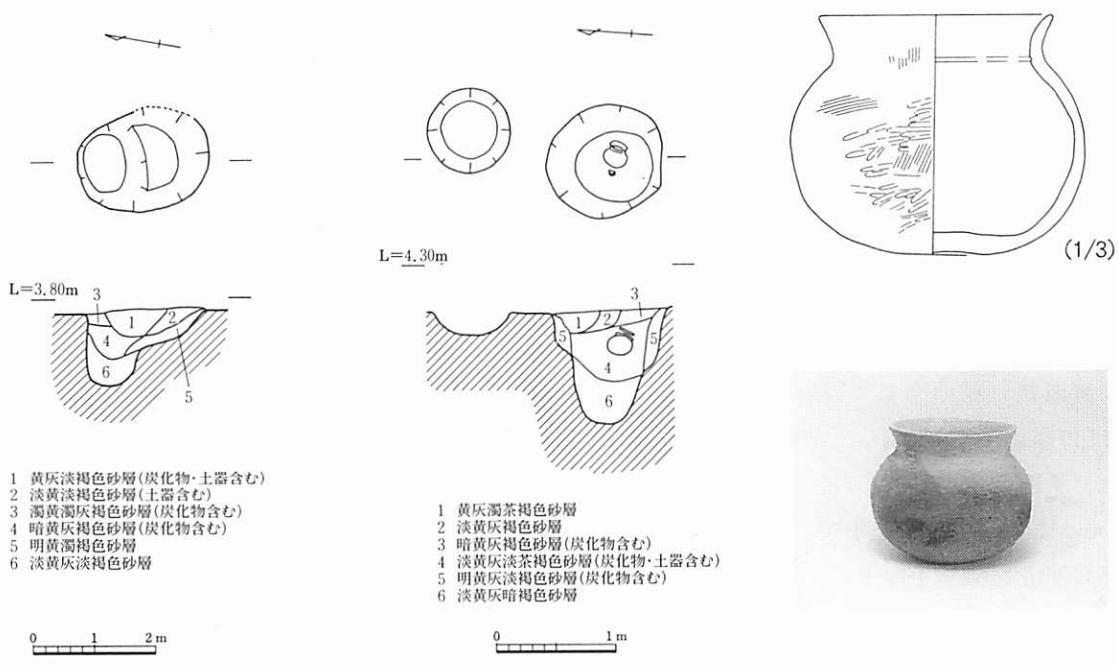
5. その他の遺構

1号土坑 (第17図 図版第8·10)

調査区A 3区内に位置し、かつ、3号堅穴式建物に隣接している。長軸は南北方向を示し長径約120cm、短径約94cmの楕円形を呈する。深さ約70cmの埋土は黄灰褐色系の砂層が堆積する。出土遺物は土器細片を数十点確認しているが図化できるものはない。

ピット1 (第17図 図版第8·10)

調査区A 1区から検出したピットである。円形を呈し、直径54cmを計り、深さ57cmの埋土は黄灰褐色の砂層が堆積し、完形の土師器(壺)と体部破片が1点出土している。壺は口径9.3cm、頸部径8.3cm、最大体部径11.6cm、底径3.6cm、頸部高2.0cm、体部高7.7cm、器高9.7cmを測る。器形は平底気味の底部に球形の体部をもつ。口縁部は体部との境でわずかに屈曲し、直立気味に伸び、先端部で外反する。外面をハケ調整後比較的丁寧なヘラミガキ調整をし、内面はナデ調整を施す。胎土は砂粒を少量と海面骨片を含み、黄橙色を呈する。土師器は基盤層から約10cmの深さ(L=4.0m)でやや寝かした状態で確認され、埋納したものと推測される。その他に直径40~90cm前後、深さ30~80cmのピットが検出された。ピット2からは39の鉱滓が1点、ピット4からは28の甕の口縁部1点、ピット12からは33の須恵器が出土した。



第17図 遺構実測図

第2節 包含層・その他の出土遺物（第18～20図 図版第19・20）

表土及び包含層と攪乱から出土した遺物である。図化した遺物は土器が81点、土製品3点、石器7点、貨幣1点（元佑通寶）の計90点である。土器には縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器があり、時期的には縄文時代から古代におよぶ。

1. 縄文時代の遺物

縄文土器（163～169）

163は口縁部に沈線を引き、貝殻文を施文する。焼成は良く黄橙色を呈する。胎土は1mm程の砂粒および海面骨片を含む。164～169は体部片で縄文を施文し、縄文帯が太く荒いもの（164～167）と細かいもの（168・169）がある。

石製品（217～219）

217・218は石鏃で、二等辺三角形を呈し、基部のわたりが弱い。217は長さ2.7cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ2.0gを測る。218は長さ3.0cm、幅1.9cm、厚さ3.5cm、重さ1.5gを測る。219は石錐で長さ3.6cm、幅0.9cm、厚さ0.6cm、重さ1.7gを測り、縦長の三角形を呈し、先端部が欠損している。石材はいずれも輝石安山岩で黒色を呈する。

2. 弥生時代の遺物

弥生土器（170～185）

170は口縁部外面に羽状文、口縁唇部内面にハケ状具による刻み目を施す。胎土は1mm程の白色砂粒及び海面骨片を多く含み淡黄橙色を呈する。171～174は口縁部内面に羽状文が施され、171・173・179・183は口縁端部外面に刻み目をもつ。175は口縁部内面に斜行短線文（5本櫛）と円形浮文が2個1対に施文され、外面をハケ調整し内面をナデ調整を施す。胎土は1mm程の砂粒を多く含み黄橙色を呈する。176・177は口縁部内面に178は外面に斜行短線文が施されている。180・181は口縁唇部に斜状の刻み目をもつ。182は体部片で外面に櫛描きの直線文、波状文を施している。184・185は底径6.0cm前後の底部で、外面をハケ調整、内面はナデ調整し黒色を呈する。

石製品（221）

221は長さ1.8cm、幅0.3cm、厚さ0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.2gを測り、淡緑灰色を呈する滑石の管玉である。

3. 古墳時代の遺物

土師器（186～212）

186～191は、口径14.0cm前後を測る壺形土器である。186～188は内湾して伸びる口縁部をもち口縁唇部を丸く納める。189は口縁唇部がやや先細りしている。190・191・208は体部の途中で屈曲し内湾気味に外方に伸びる口縁部をもつ。191は内面黒色処理を施す。193・194は壺の口縁部で193の口径10.2cm、194の口径12.6cmを測り内外面をミガキ調整している。199～204は甕形土器で、口径11.2～20.4cmまでのものが各種みられ、最も多いのは口径12.0cm前後のものである。195～200は口縁唇部を丸く納め、195～197は頸部で緩く屈曲し、比較的直立気味に外反して伸びる口縁部をもつ。198～200は頸部で鋭く屈曲し外反して伸びる口縁部をもつ。201～204は口縁唇部を面取りしている。外

面をハケ、ナデ調整し、内面をハケ、ナデ、ケズリ調整している。205は口径26.6cmを測る移動式竈の上部である。外面をハケ調整し内面を指で押さえている。207・209・210は高坏形土器で、207は口径15.0cmを測り口縁部先端で外反し壇形の坏部をもつ。内外面共にミガキ調整を施す。209は底径8.4cmを測る脚部である。坏部外面をハケ調整、脚裾部オサエ、ナデ調整、坏部内面をミガキ調整、脚裾部内面をナデ調整している。210は脚柱部である。211・212は手捏土器で、211は口径5.2cm、底径3.6cm、器高3.3cmを測る。212は口径6.0cm、底径4.4cm、器高3.7cmを測る。

石製品（220・222～224）

220は滑石の紡錘車で直径3.8cm、厚さ2.0cm、孔径0.8cm、重さ38.1gを測り円錐状を呈する。外面には放射状に線が掘られている。222は緑色凝灰岩の管玉で長さ1.8cm、幅0.7cm、厚さ0.6cm、孔径0.2cm、重さ1.6gを測る。

須恵器（226～245・247～255）

226～238は坏蓋で、口径13.0cm前後のものが多く、全体的に稜がはっきりしたもの（226～231）と稜が不鮮明なもの（232～236）がある。口縁端部はいずれも弱い段をもって内傾するが231は口縁端部に段を持たず先端は丸みをおびた面をもつ。天井部はヘラケズリ調整を施すものが見られる（228・229・231・233・236）。237は口径16.6cmを測り、口縁端部は屈曲して垂下する。238はボタン形のつまみ部で天井部はヘラケズリ調整を施す。239～245は坏で口径9.2～15.2cmまでのものが見られる。239の口縁部は受部の立ち上がりが長く内傾する。240は外反気味に直立し、241は口縁唇部をやや内側に屈曲する。242・243は受け部の立ち上がりが短い。247・248は高坏である。247は無蓋高坏の坏部で、口径14.8cmを測り、口縁部内外面に釉が付着する。248は底径8.8cmを測る高坏の脚部で、端部が短めに開き弱い段をもって内傾する。249～251は壺で、249の口頸部には3条の凹線と波状文が見られる。250は口径14.4cm、251は口径19.4cmを測り、口縁端部を上方につまみ口縁帯をつくる。口縁部には降灰が付着する。252・253は甕で、252は口縁端部を面取りし、外方へ突出しげみに納める。253は口径17.2cmを測り、口縁端部を面取りしている。254は波状文を施した頸部片である。255はタタキ調整を施した体部片である。

4. その他の遺物

須恵器（246）

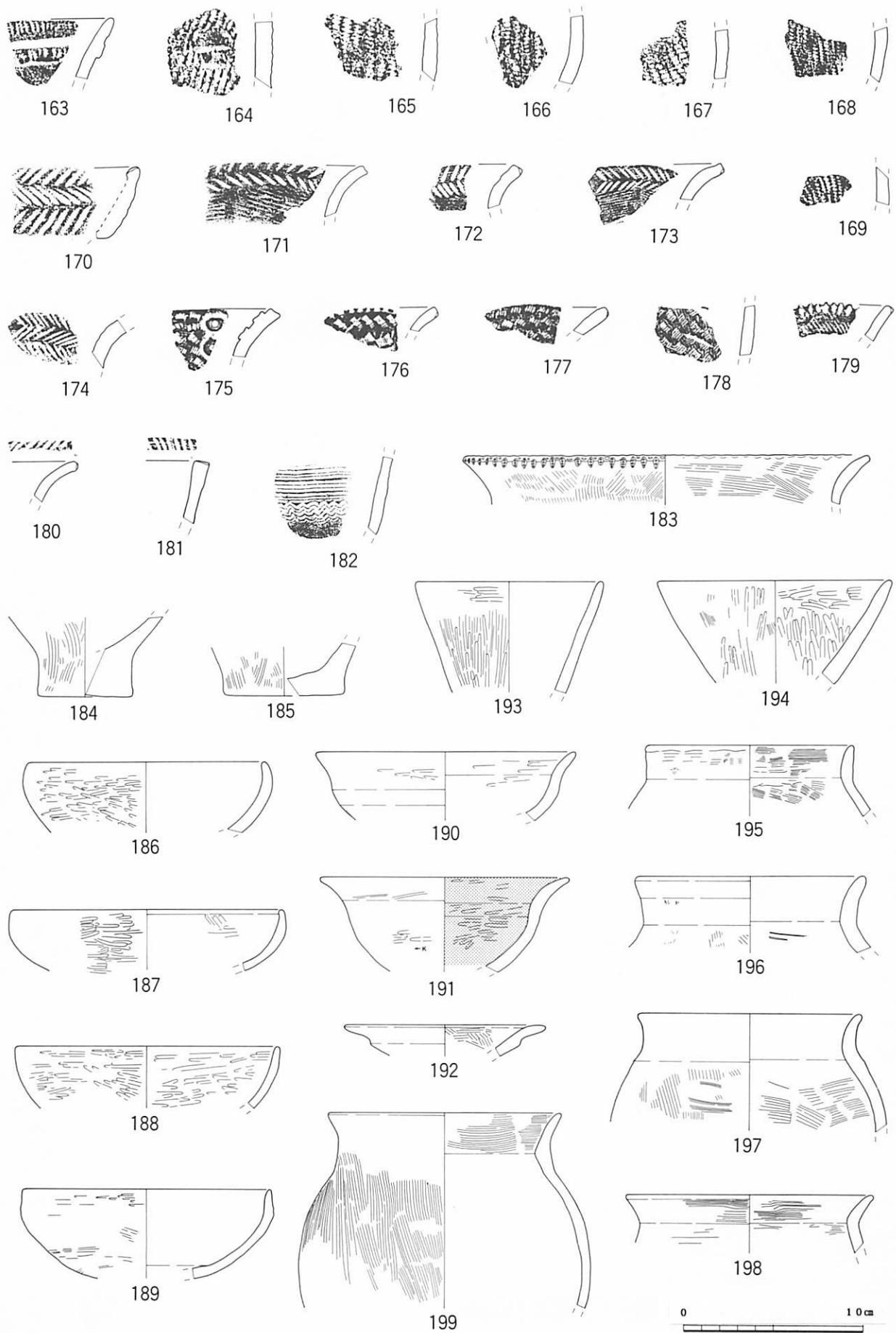
246は有台坏で高台が外方に踏ん張る形状をし、内外面をナデ調整、底部をヘラケズリ調整している。胎土は砂粒及び海面骨片を含み、淡灰色を呈する。

土製品（214～216・225）

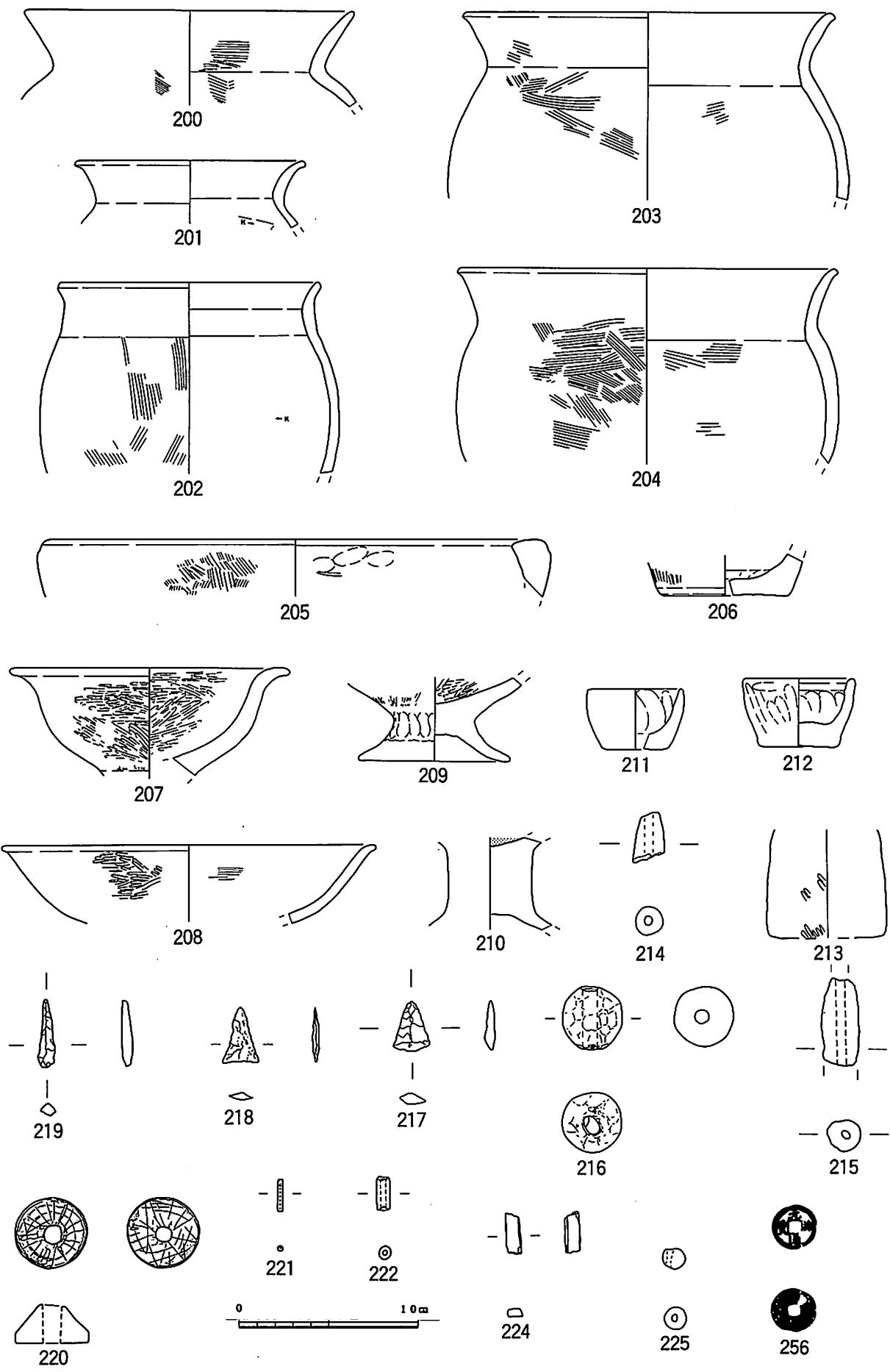
214～216は土錘で3点出土しているが2点（214・215）は欠損し、完形品は1点（216）のみである。216は土師質の円形を呈し長さ3.5cm、直径3.1cm、孔径0.8cm、重量31.6gを測る。225は土玉状の土製品で長さ1.0cm、直径1.2cm、孔径0.3cm、重さ1.4gを測る。

石製品（224）・貨幣（256）

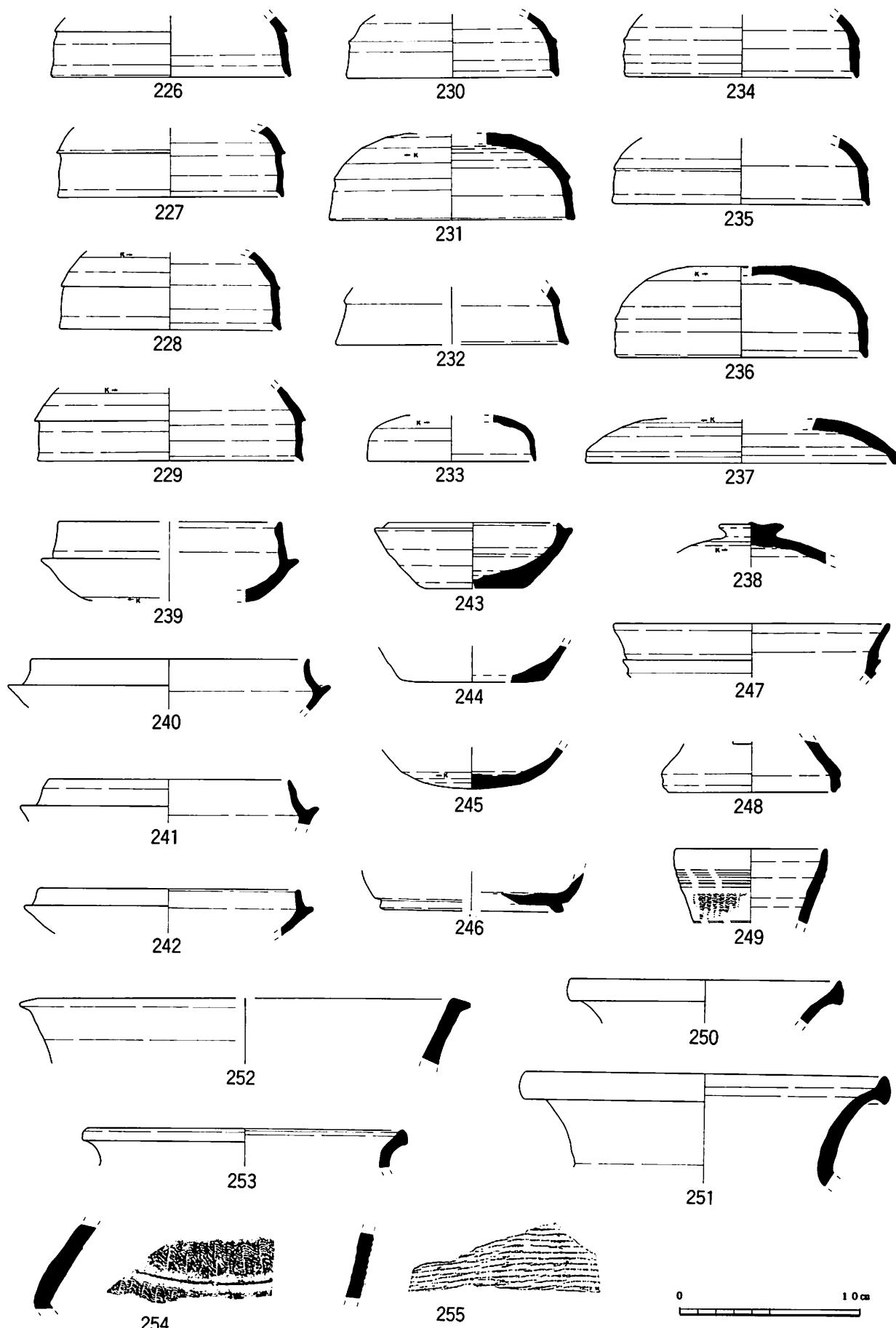
224は輝石安山岩を板状に加工したもので用途は不明である。大きさは長さ2.2cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、重さ1.6gを測る。256はB2区より出土した北宋錢の元祐通寶で、直径2.4cmを測る。行書体で初鑄年は西暦1086年である。



第18図 包含層・その他の出土遺物実測図 10 (1/3)



第19図 包含層・その他の出土遺物実測図 11 (1/3)



第20図 包含層・その他の出土遺物実測図 12 (1/3)

第4章 まとめ

「柳田砂山地区」は、広範囲な寺家遺跡の中で東南端にあたり、前面に邑知地溝帶（低湿地）が広がる砂丘裾部に位置する。

これまでの調査は本遺跡の発見のもととなった「祭祀地区」や「砂田地区」周辺に集中しており、その調査成果は周知のとおりである。本調査区周辺では北西約300mで荒型等が出土した第4次調査区。1995年に県営ほ場整備事業に伴う第11次調査が石川県立埋蔵文化財センターによって行われ、周辺の畠地に土器が散布していることが知られていたが、その性格等については不明な点が多かった。

今回の調査は小規模な面積（100m²）にもかかわらず良好な資料が得られ、その性格の一端をうかがい知ることができた。

検出した遺構は重複した3棟の堅穴式建物（1号堅穴式建物→2号堅穴式建物→3号堅穴式建物）、土坑1基、ピット19を検出し、内ピット1には土師器の壺を埋納していた。出土した土器は各建物跡の覆土中からのものが多く、田辺編年Ⅰ期のTK47並行期に比定される須恵器やそれに伴う土師器が一定量出土した。また、最終の3号建物が廃絶した直後に投棄された一括の土器はほぼ同時期に所属するもので、建物が短期間に2度の立て替えが行われたことが推定される。その他の出土遺物を見るところこれらの土器と共に、祭祀用品の小型銅鏡の破片や管玉、ガラス玉、臼玉が多数出土した。

以上のことから、周知の時期を溯って祭祀的行為が行われていたことが明らかとなり、遺跡の特徴から堅穴式建物には祭祀を司る有力者の存在が推測され、該期の本遺跡内における中心的集落が調査区及び周辺に展開していることがうかがわれる。また、周辺に位置する古窯跡群や古墳群等の比較検討を今後の課題として進めたい。

〈引用・参考文献〉

- 小嶋芳孝『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター 1886・1888
田嶋明人『漆町遺跡Ⅰ・Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター 1886・1888
越坂一也『永町ガマノマガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1887
木立雅朗・田嶋明人『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣
谷内碩央・荒木孝平『寺家遺跡』羽咋市教育委員会 1983
小嶋芳孝・荒木孝平『寺家』羽咋市教育委員会 1984
谷内碩央・今井淳一『寺家遺跡第8次調査報告書』羽咋市教育委員会 1989
宮下栄仁『寺家遺跡第10次調査報告書』羽咋市教育委員会 1993
河村好光『羽咋市柳田シャコデ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1984
谷内碩央・木立雅朗・小嶋芳孝・浜岡賢太郎『柳田シャコデ廃寺』羽咋市教育委員会 1987
谷内碩央『釜屋・新保・猫ノ目遺跡』羽咋市教育委員会 1982

図 版

(註 遺物番号は挿図遺物番号で表示する)



寺家遺跡と調査箇所
(上空から)



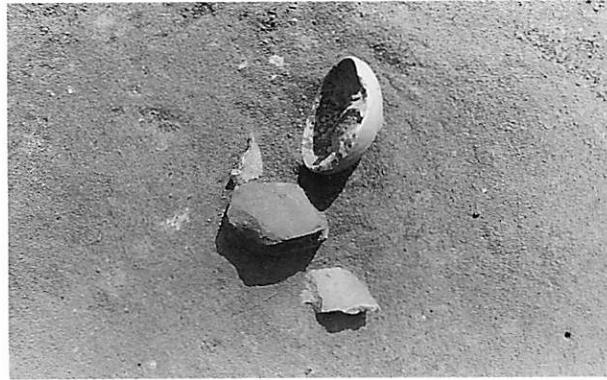
(1) 調査区近景 (東から)



(2) 焼土面検出状況・全景 (西から)



(1) 燃土検出 (東から)



(3) 土器出土 (西から)



(2) 燃土検出 (西から)



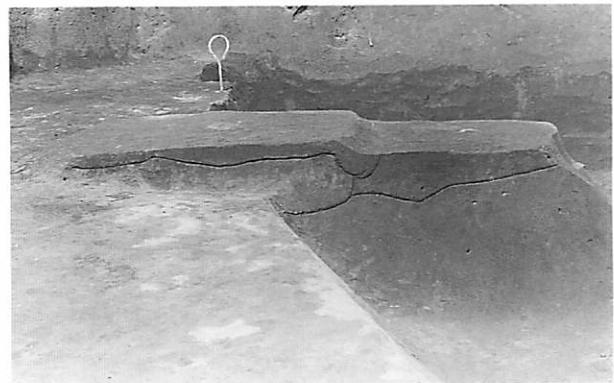
(4) 一括土器出土 (北から)



(5) 遺構検出状況・全景 (西から)



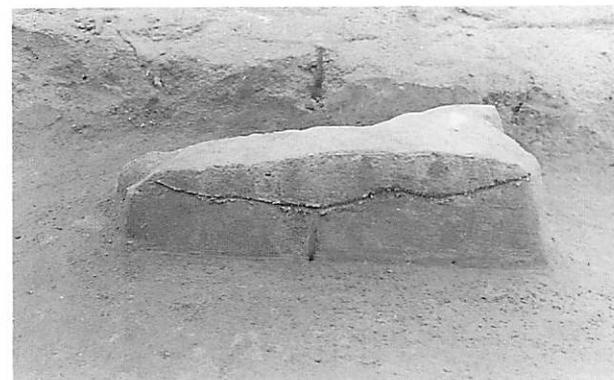
(1) 焼土検出 (西から)



(3) 焼土検出 (東から)



(2) 焼土検出 (東から)



(4) 焼土断面 (東から)



(5) 遺構掘り下げ作業 (東から)



(1) 遺構・遺物検出状況・全景 (西から)



(2) 遺構・遺物検出状況 (東から)



(1) 3号竖穴式建物出土遺物 (東から)



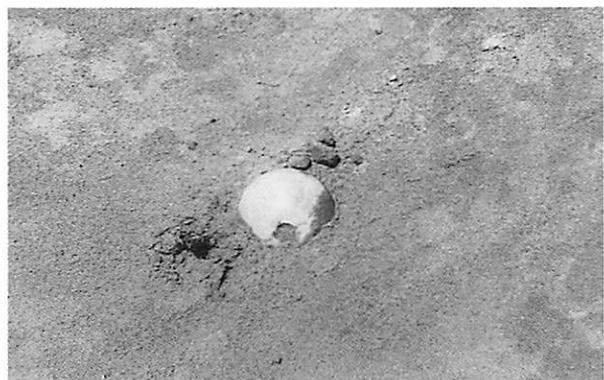
(2) 3号竖穴式建物出土遺物アップ (東から)



(1) 銅板片出土 (上から)



(3) 鉱滓出土 (南から)



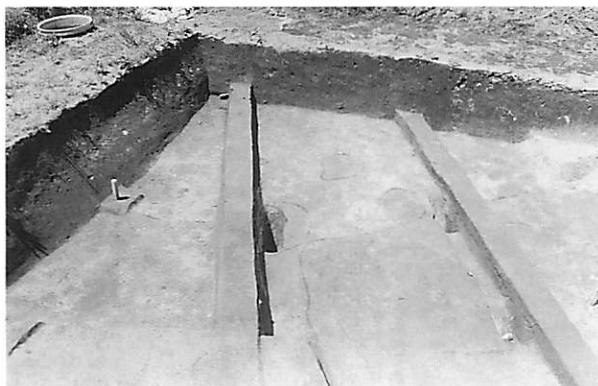
(2) 紡錘車出土 (東から)



(4) 白玉出土 (上から)



(5) 遺構検出状況 (東から)



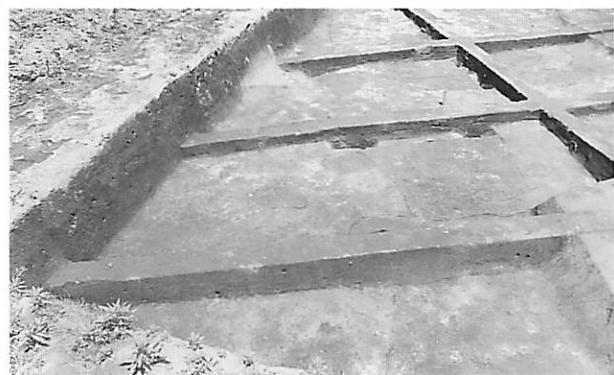
(1) 1号竪穴式建物検出 (南から)



(3) 3号竪穴式建物検出 (北から)



(2) 2号竪穴式建物検出 (西から)



(4) 1・2号竪穴式建物検出 (西から)



(5) 1号土坑断面 (西から)



(7) ピット9断面 (南から)



(6) ピット1断面 (西から)



(8) 1号竪穴式建物焼土 (南から)



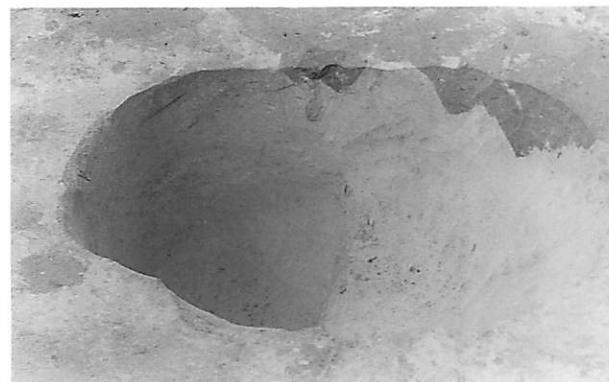
(1) 調査区完掘・全景 (東から)



(2) 1・2・3号竪穴式建物完掘 (東から)



(1) 3号竪穴式建物焼土検出 (西から)



(3) 1号土坑完掘 (西から)



(2) 3号竪穴式建物焼土断面 (北から)



(4) ピット1完掘 (西から)



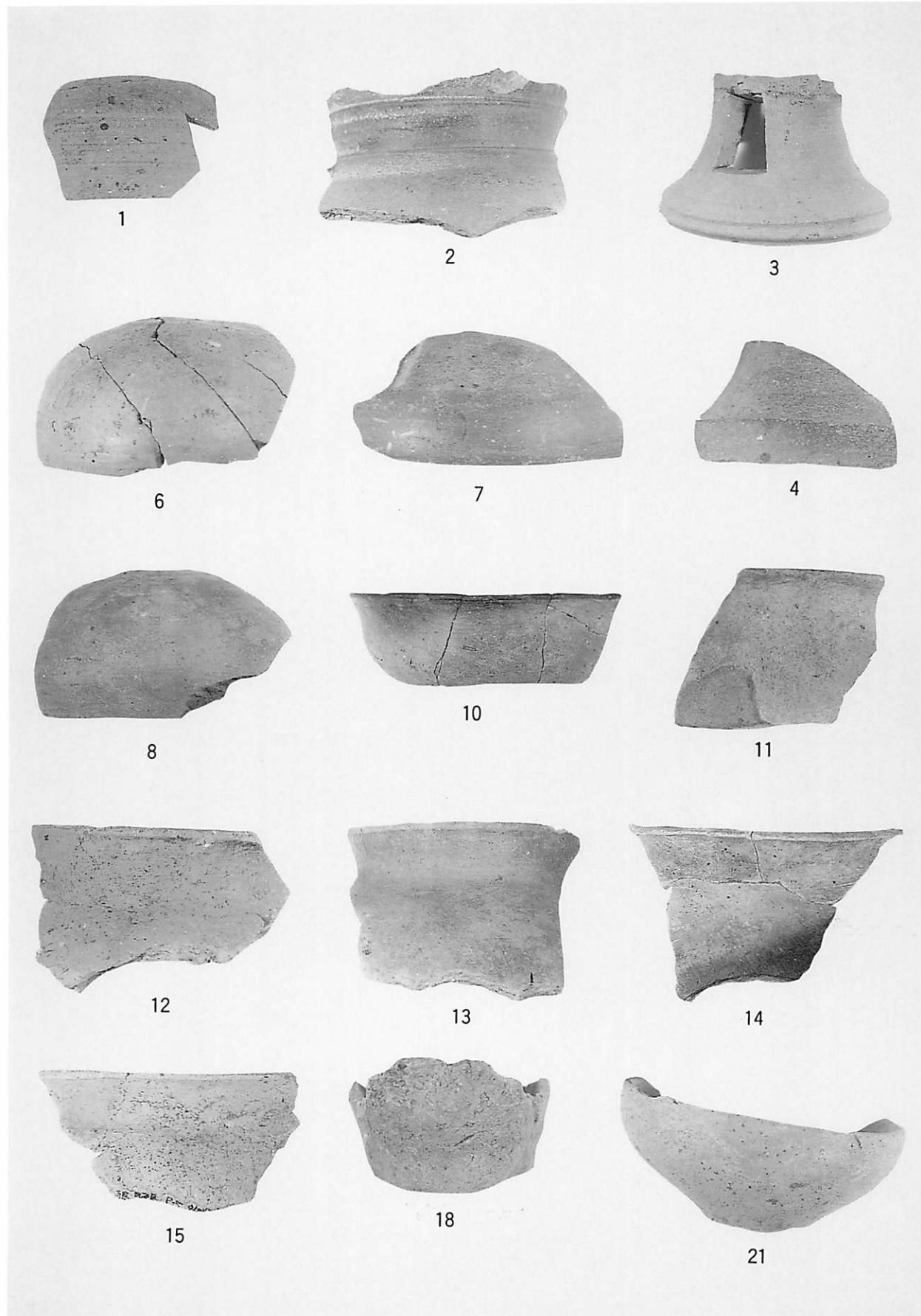
(5) 調査区西側壁面 (東から)



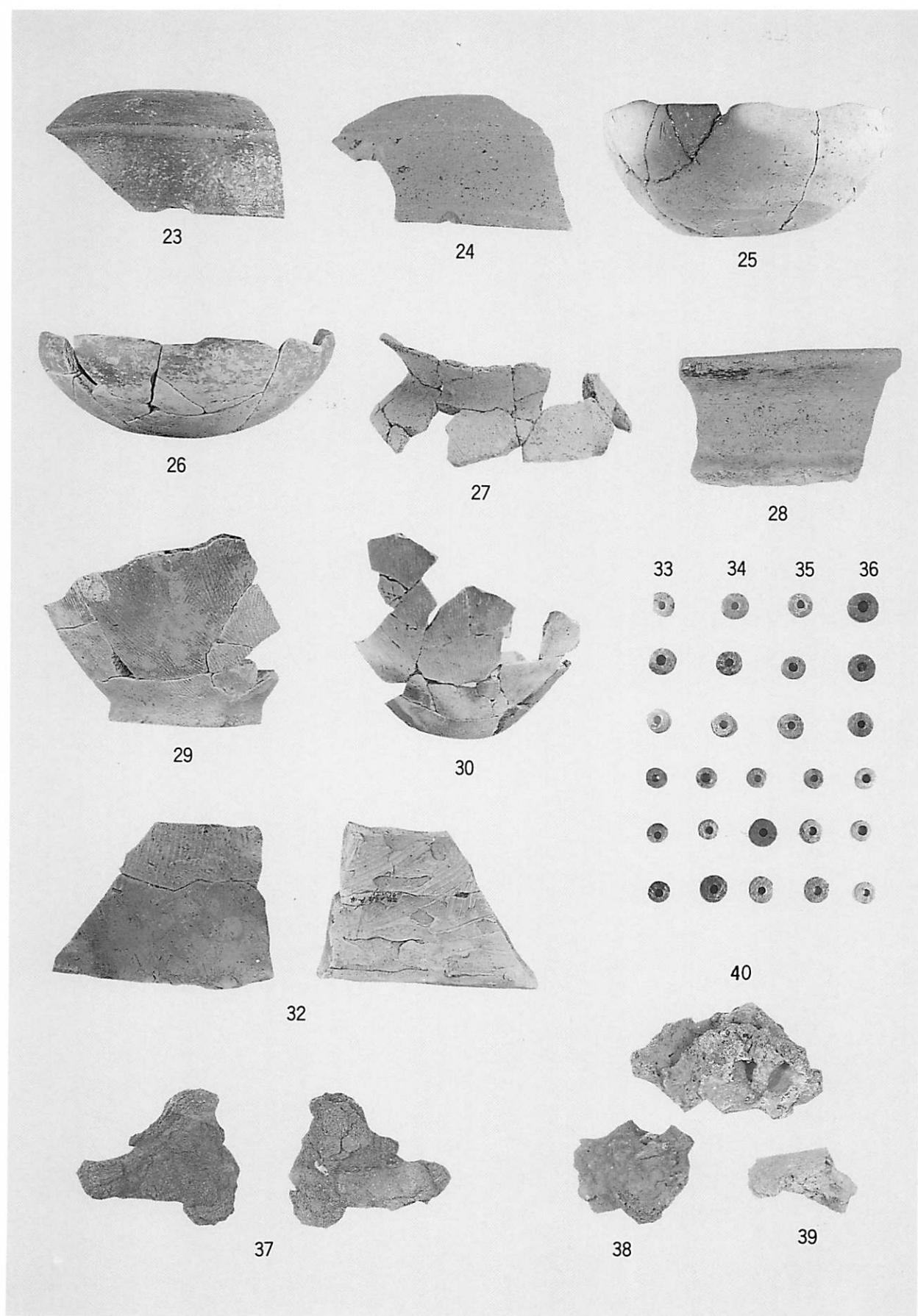
(1) 調査区北側壁面 (南から)



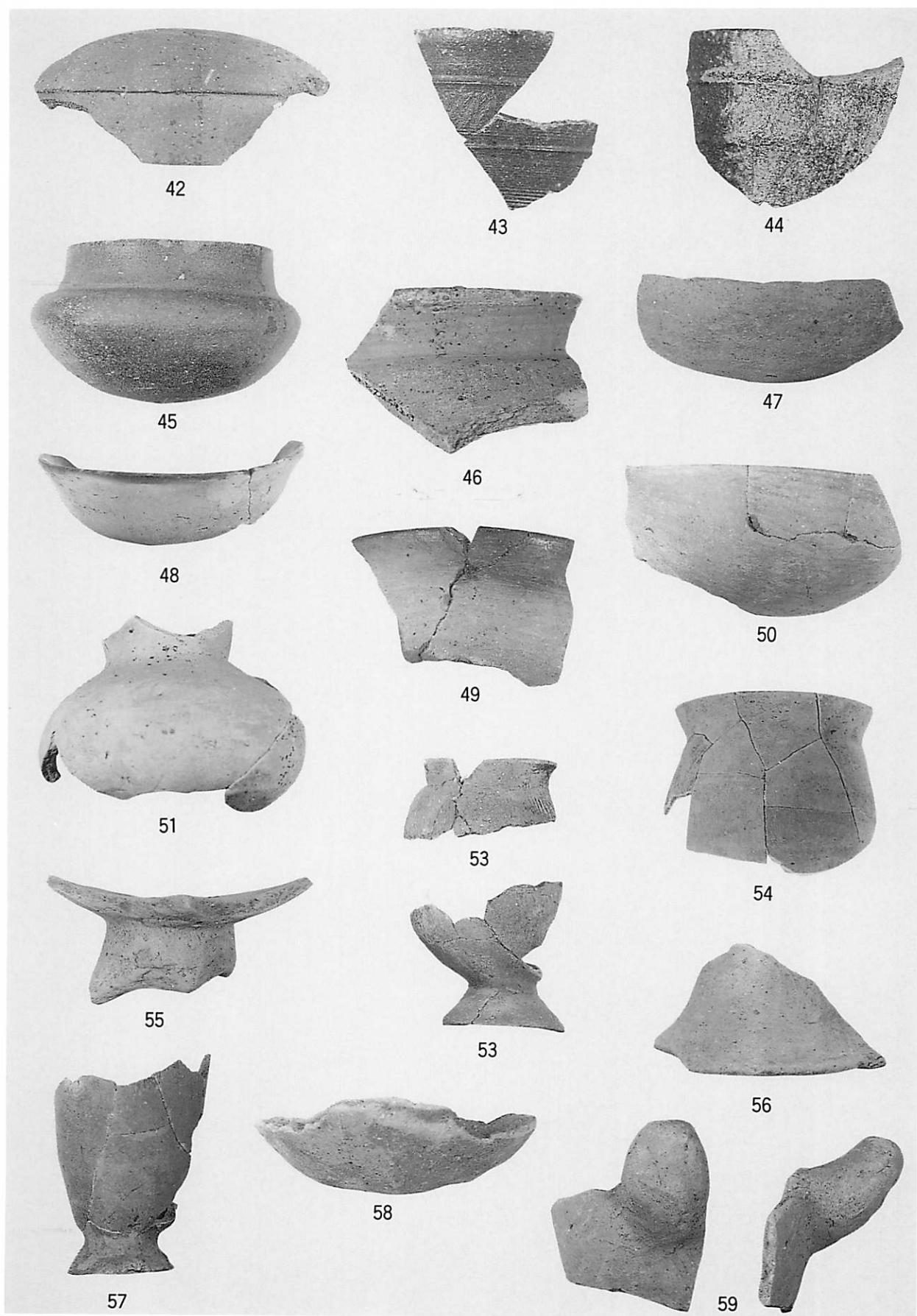
(2) 発掘調査協力者



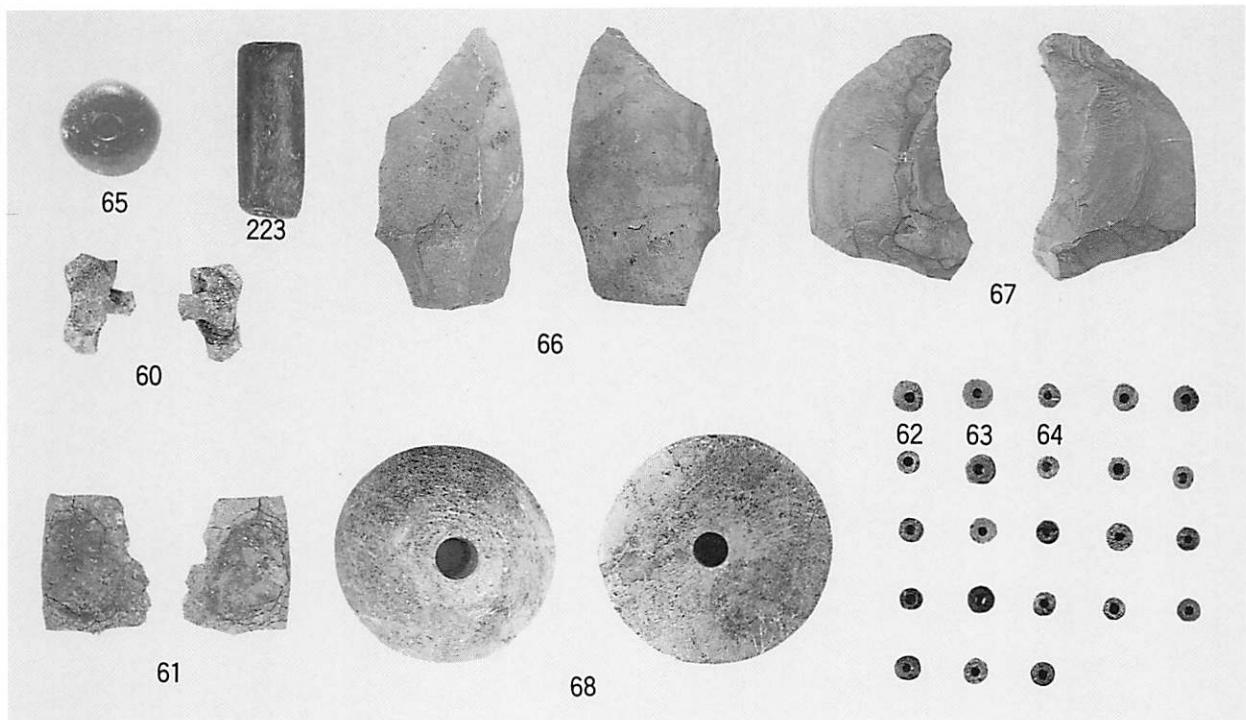
焼土と包含層上面の出土遺物



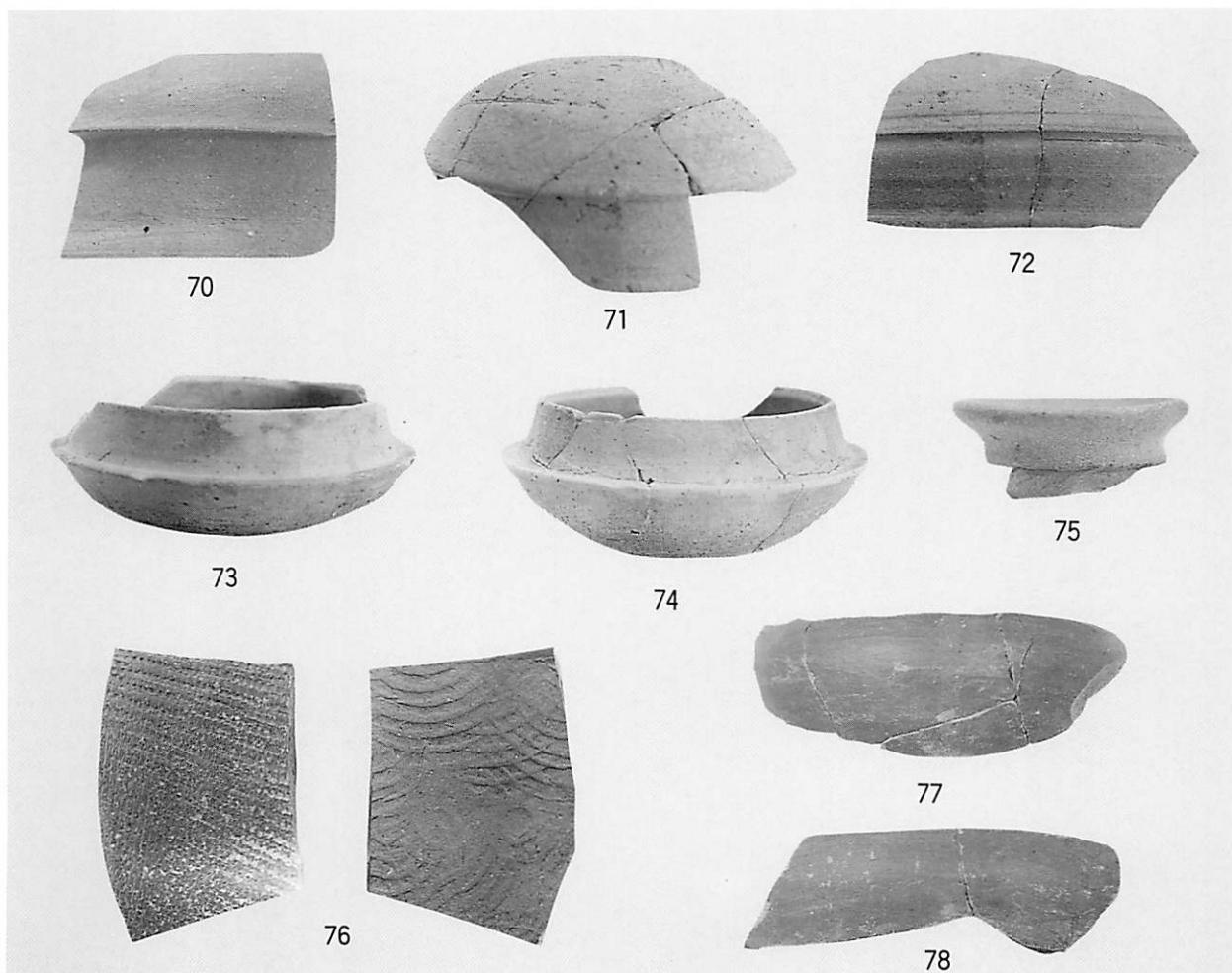
1号竖穴式建物出土遺物



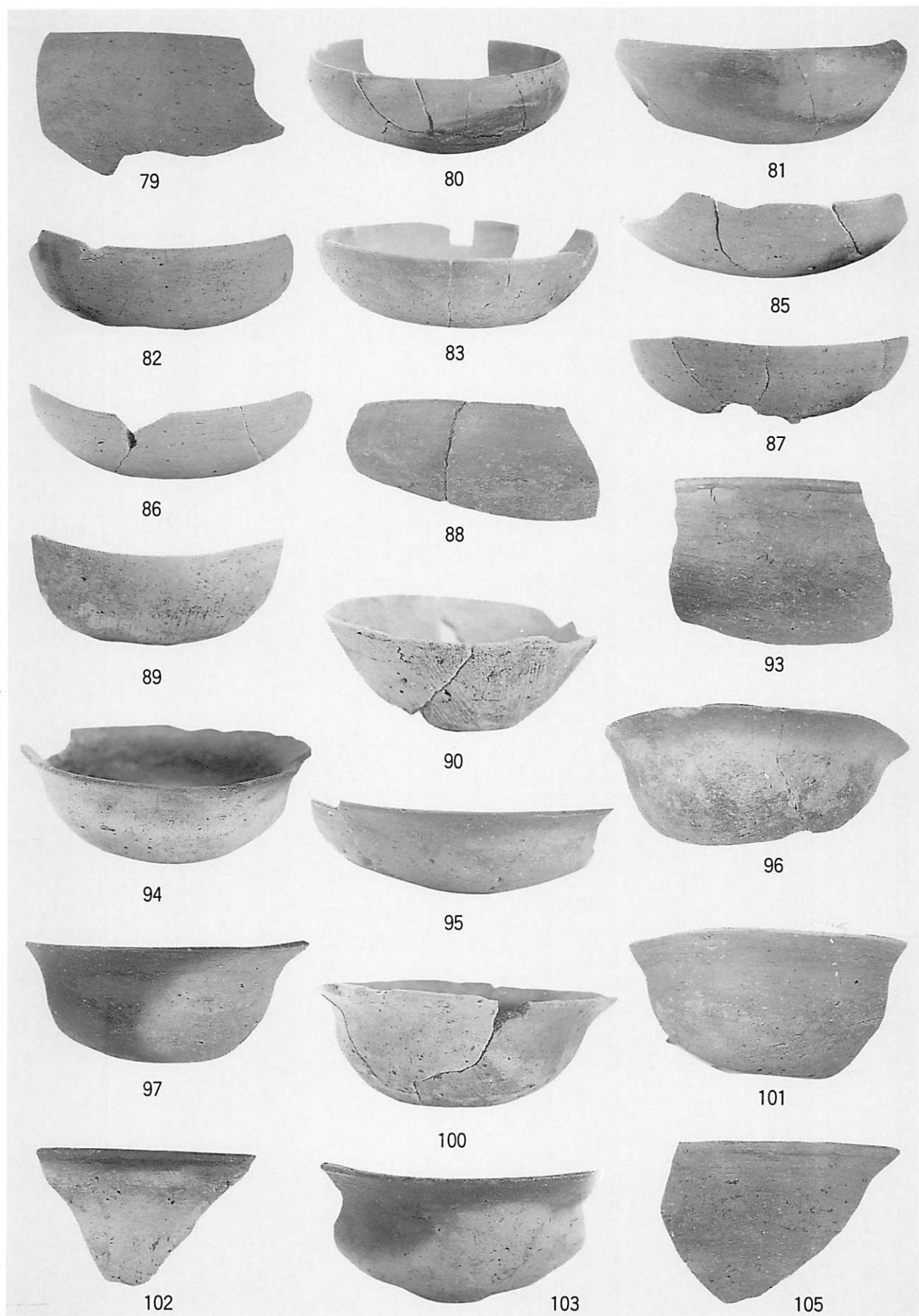
2号竪穴式建物出土遺物



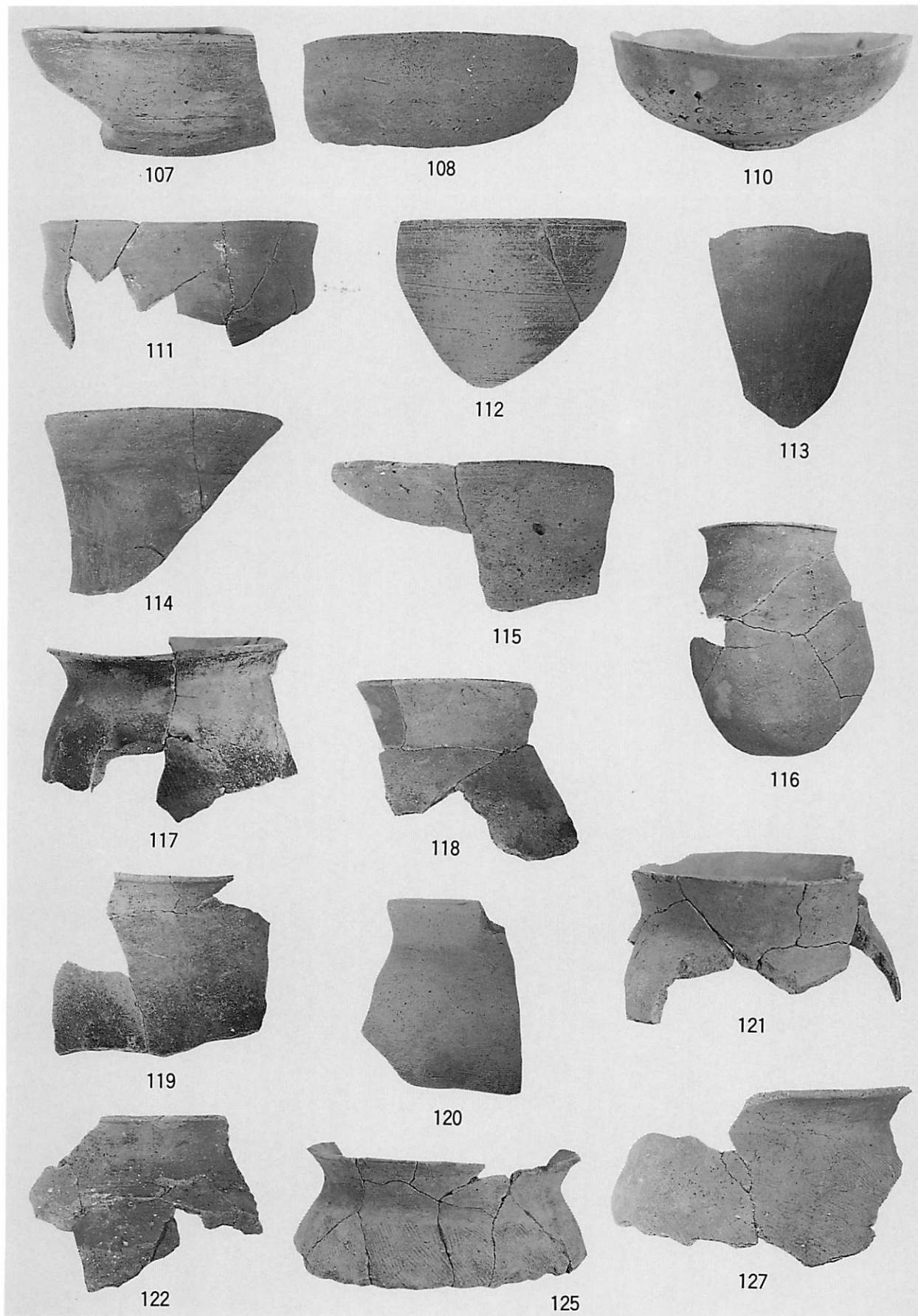
2号竖穴式建物出土遺物



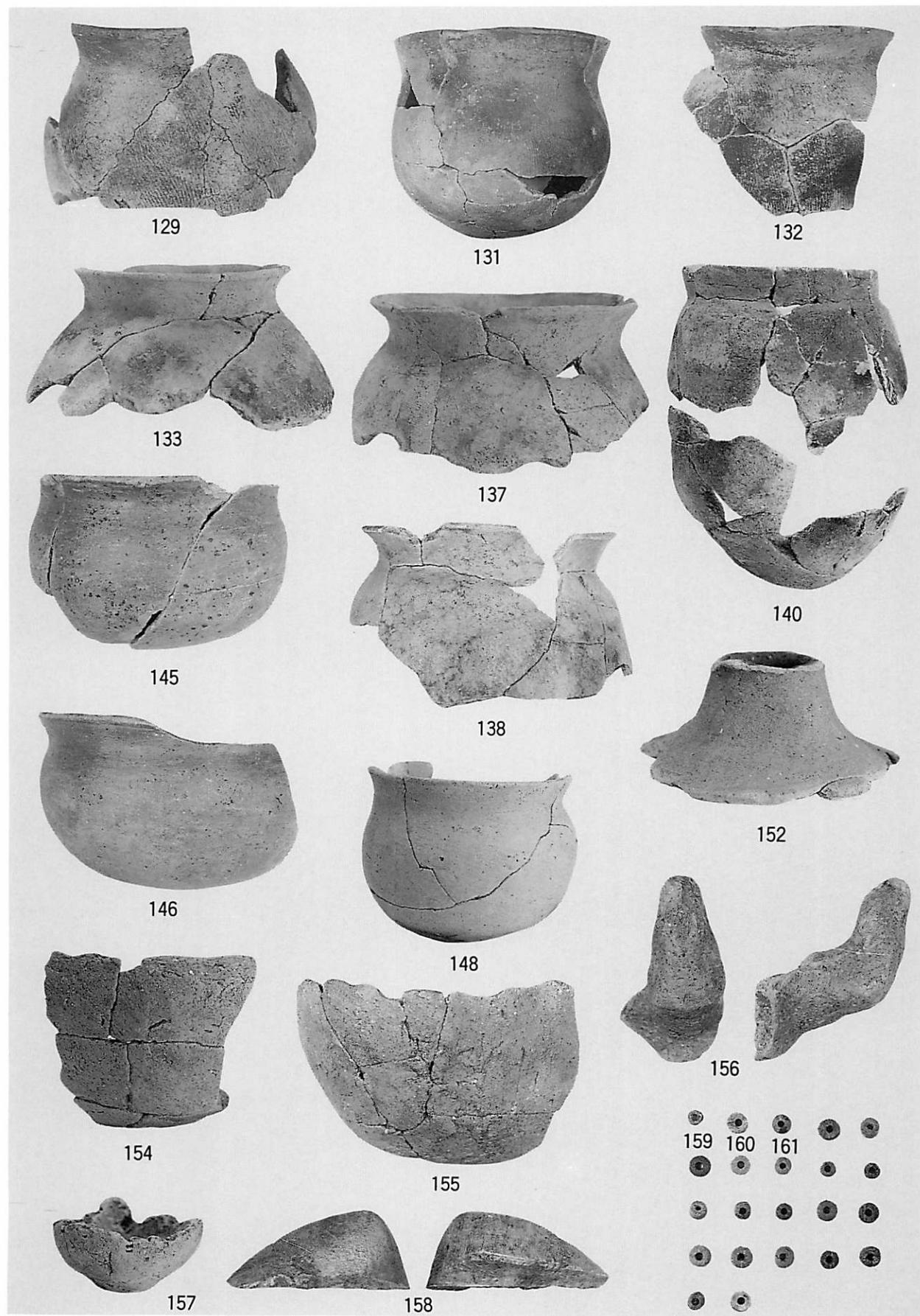
3号竖穴式建物出土遺物



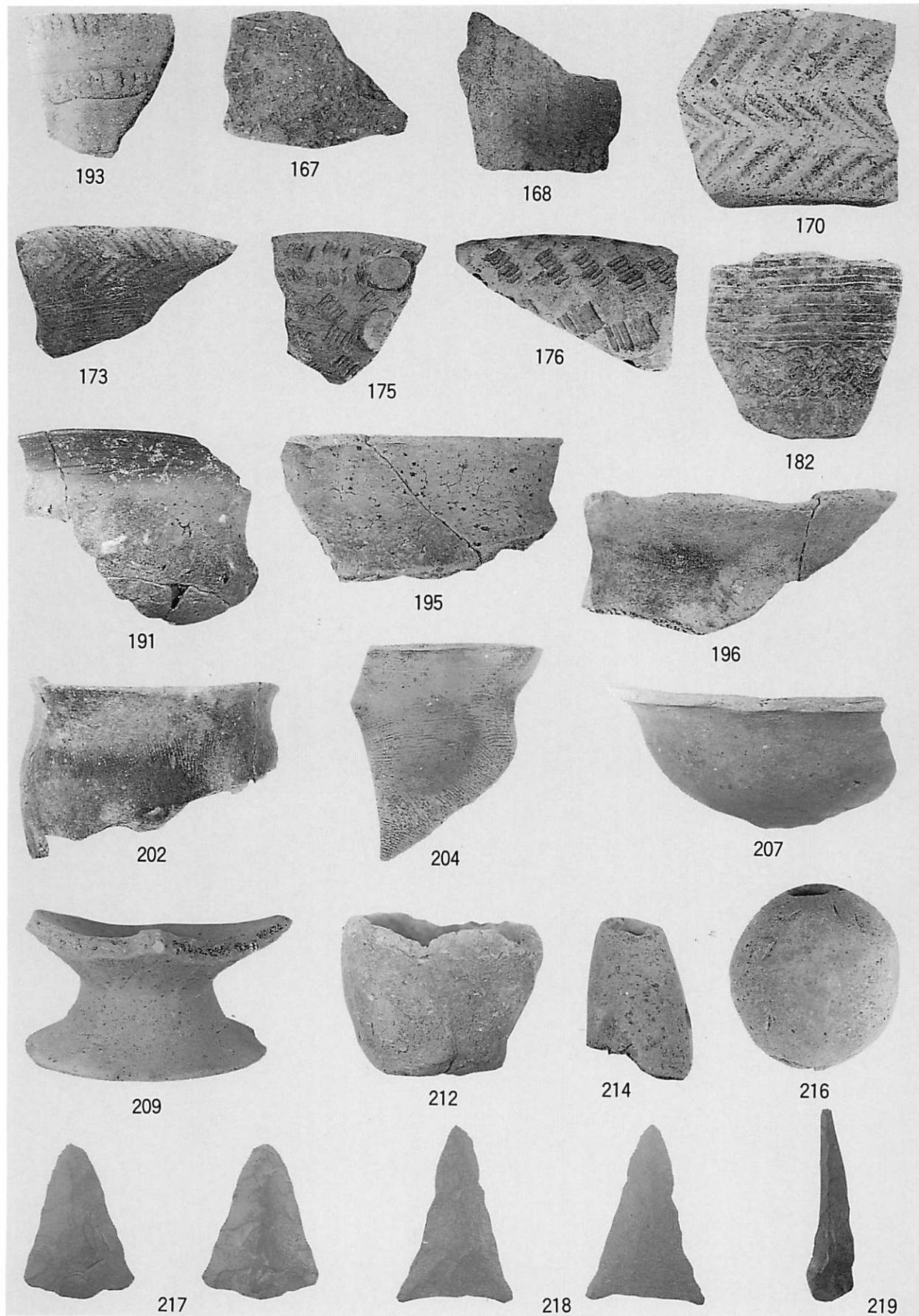
3号竪穴式建物出土遺物



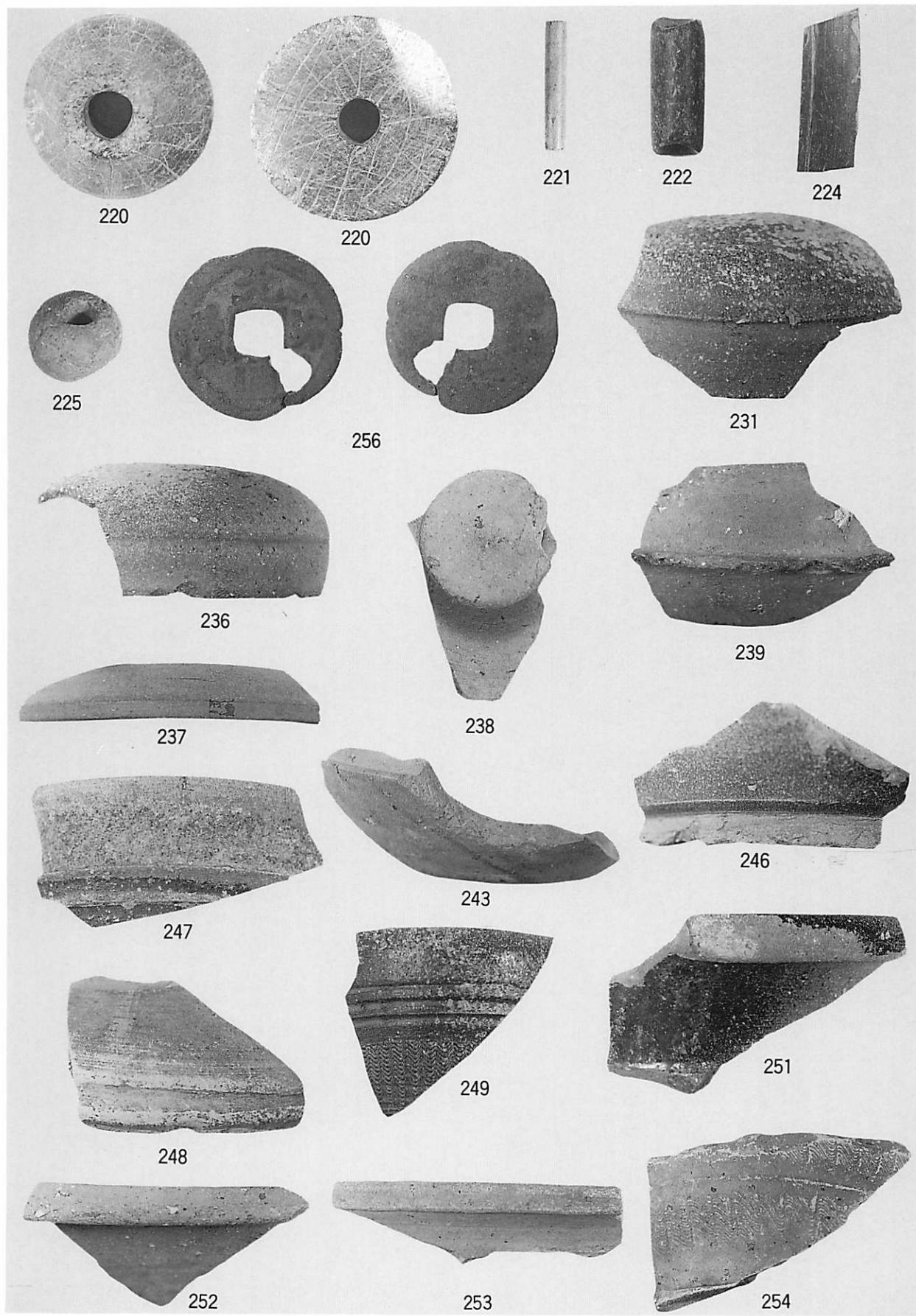
3号竪穴式建物出土遺物



3号竪穴式建物出土遺物



包含層・その他の出土遺物



包含層・その他の出土遺物

寺家遺跡第12次調査報告書

発行日 平成9年3月31日

発行者 羽咋市教育委員会
羽咋市旭町ア200番地

印刷 青山印刷
羽咋市南中央町キ131番地

寺家遺跡第12次調査報告書正誤表

ページ	誤	正
i	<u>堅穴式建物</u>	<u>堅穴式建物</u>
ii	//	//
iii	//	//
1	//	//
9	第6図 焼土及びその周辺	第6図 焼土と包含層上面
10	<u>堅穴式建物</u>	<u>堅穴式建物</u>
12	//	//
//	60は鏡の中央に位置する把手	60は鏡の中央に位置する紐孔
14	<u>堅穴式建物</u>	<u>堅穴式建物</u>
//	第9図 出土遺物実測図の2色刷りの赤(遺物)が天地逆	
15・16	第10図 遺物実測図	第10図 遺構実測図
24	<u>堅穴式建物</u>	<u>堅穴式建物</u>
25	土製品3点	土製品4点
//	計 <u>90</u> 点	計 <u>93</u> 点
26	石製品(220・222~224)	石製品(220・222)
30	<u>堅穴式建物</u>	<u>堅穴式建物</u>
図版第4	(3)焼土検出	(3)焼土断面